

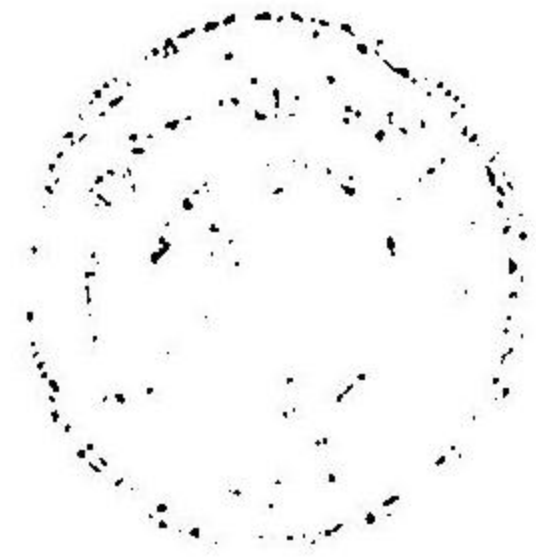
2-140

唐津舊藩主

子爵小笠原長生公題字

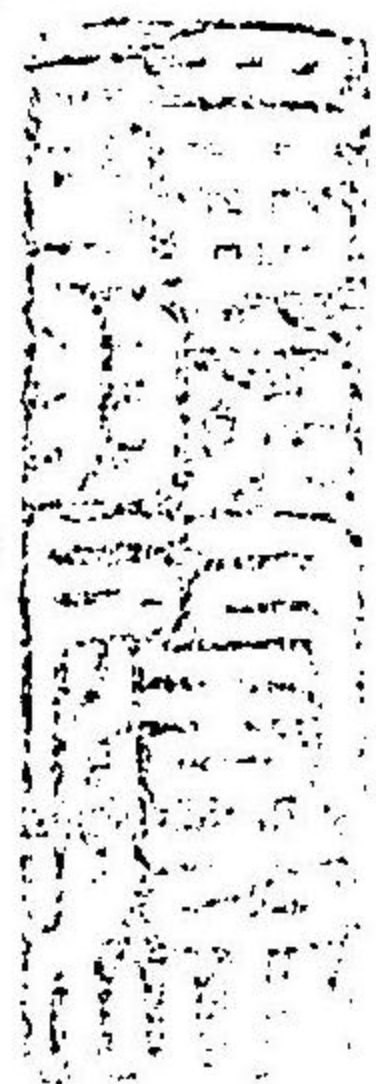
并ニ遊舞鶴城趾記

唐津名勝案内



唐津 牧川藏版

永



勝

如

畫

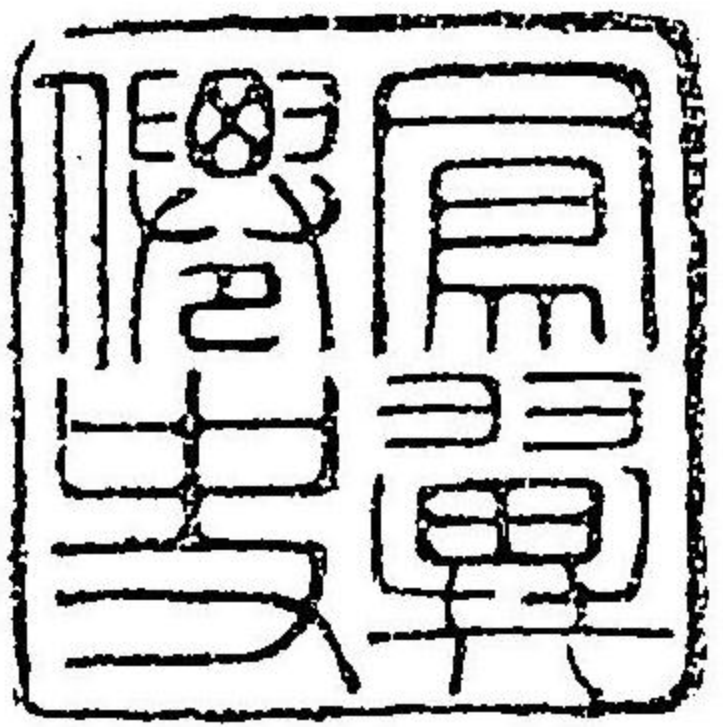
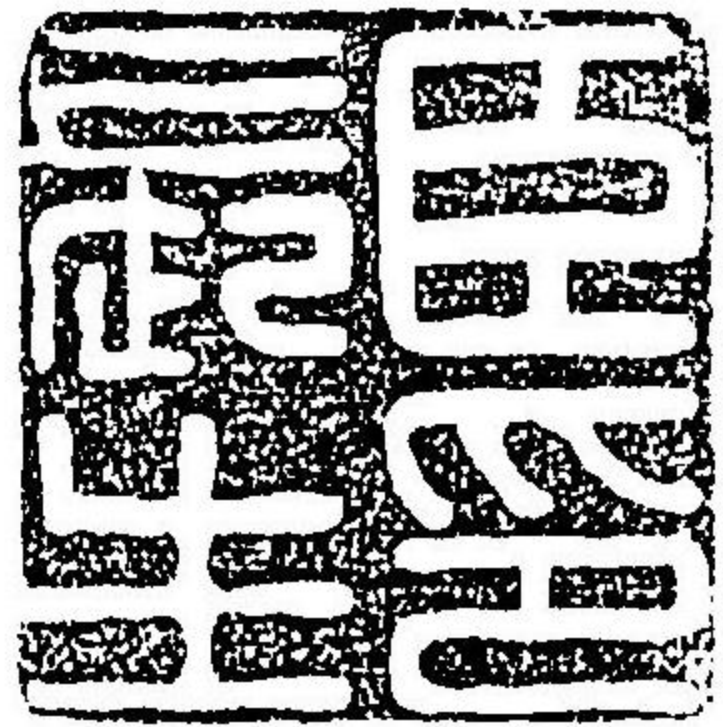
美

生

如

書

長生



遊舞鶴城址記

鳳翼漁夫

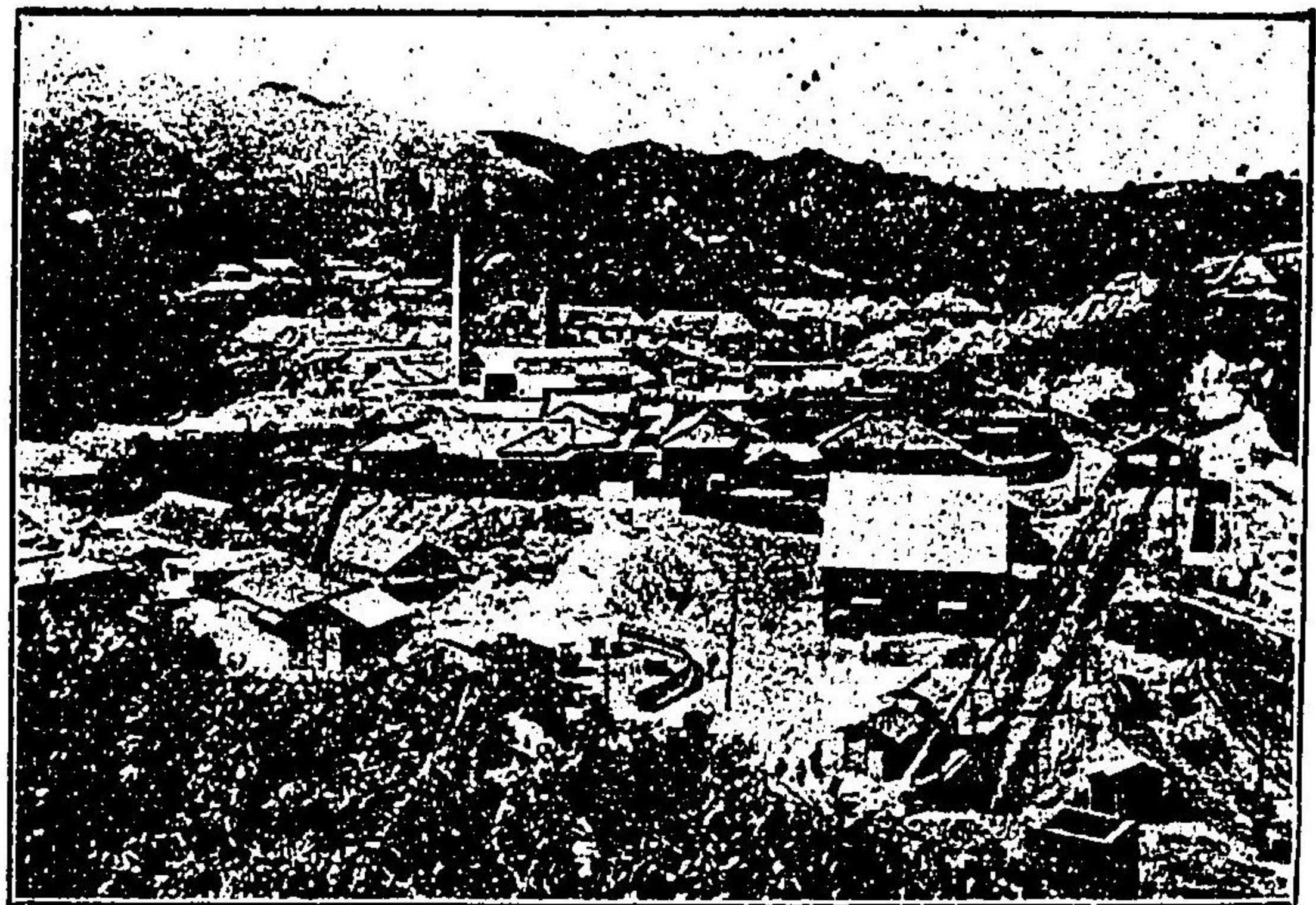
舞鶴城趾何其寂寞乎。山影波光。滿目風景。今猶昔。而天下形勢一變矣。曾家君之在此也。譙樓巍然于雲表。堅壘深濠。稱天下無比。世人不知有唐津。而獨知有此城。自封建制廢二十余年。金城變爲田園。湯池水涸。鷺鷥求食。世人獨知有唐津。而不知曾有此城。徒使故老注淚於西風落日之間焉。今茲余來遊過門。足尖稍仰。道左有鄉校。

曰大成。其背誅樹竹開白田。其前有小丘。石燈百餘級。螺旋而登。磴盡得公園。此地西北面玄海。激浪倒翻。聲如奔雷。群島碁峙星羅于其間。如張翼睥睨天下者。爲鷹島。如掠水欲飛者。爲鳥島。而大島神集諸島。如遠如近濃淡錯襍竦密相配。東則斷崖數丈臨松浦河。河水滔々西走。至咽喉之處。爲沙瀨所蹙。欲伸而不伸。怒爲急湍。嚙岸轉石。勢不可當。沙上翠松成行。不交一異木者。爲霓

松林。近者依約可辨其幹。遠者如黛如點。與山色冥合。不能極其端。松間黃茅隱見者。爲滿島。青山巍然涵影清流者。爲鏡山。真活畫圖矣。左右揖余曰。風影美則美矣。然孰若焉乎甘棠之美不能忘也。乃爲指點殘礎敗堞曰。是大公之攸居。指點蕭然林木曰。是大夫人攸息。於是懷古之情油然而溢。余顧左右曰。今過此地不能無麥秀之感焉。雖然天下何物無盛衰。今也聖天子在上。封建廢而



佐用姫舊跡巾振山下松浦岩



唐津芳谷炭坑

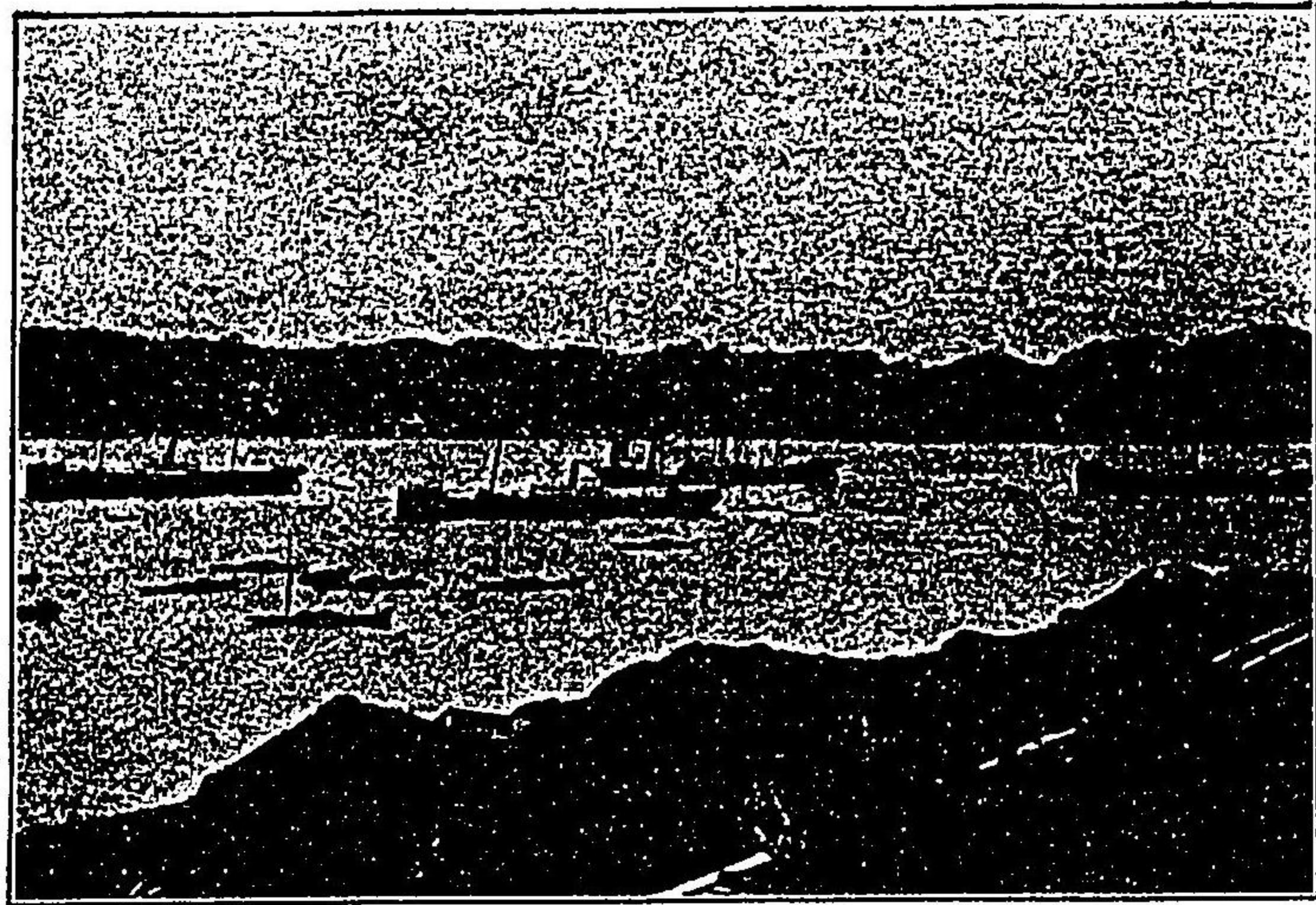
郡縣興。神州光輝炳耀于萬邦。則豈可不為國家
額手邦。既歸旅舍書為記。時明治己丑春王正月。
是日從遊者盡戴白。嘗待家君之徒也。

俯仰低回感慨係焉未段尤見忠愛之情敬服々

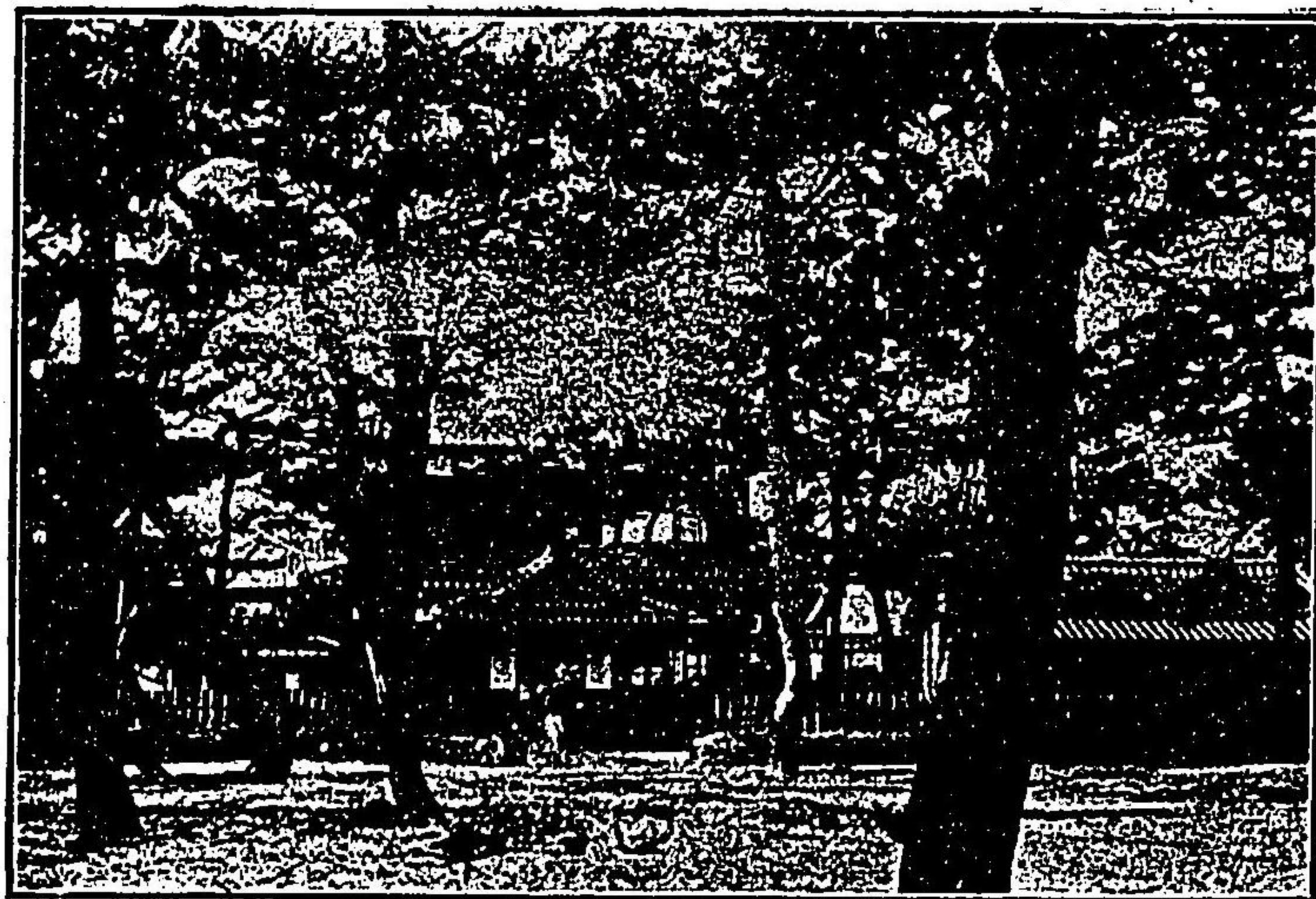
丙申五月二十日

社末

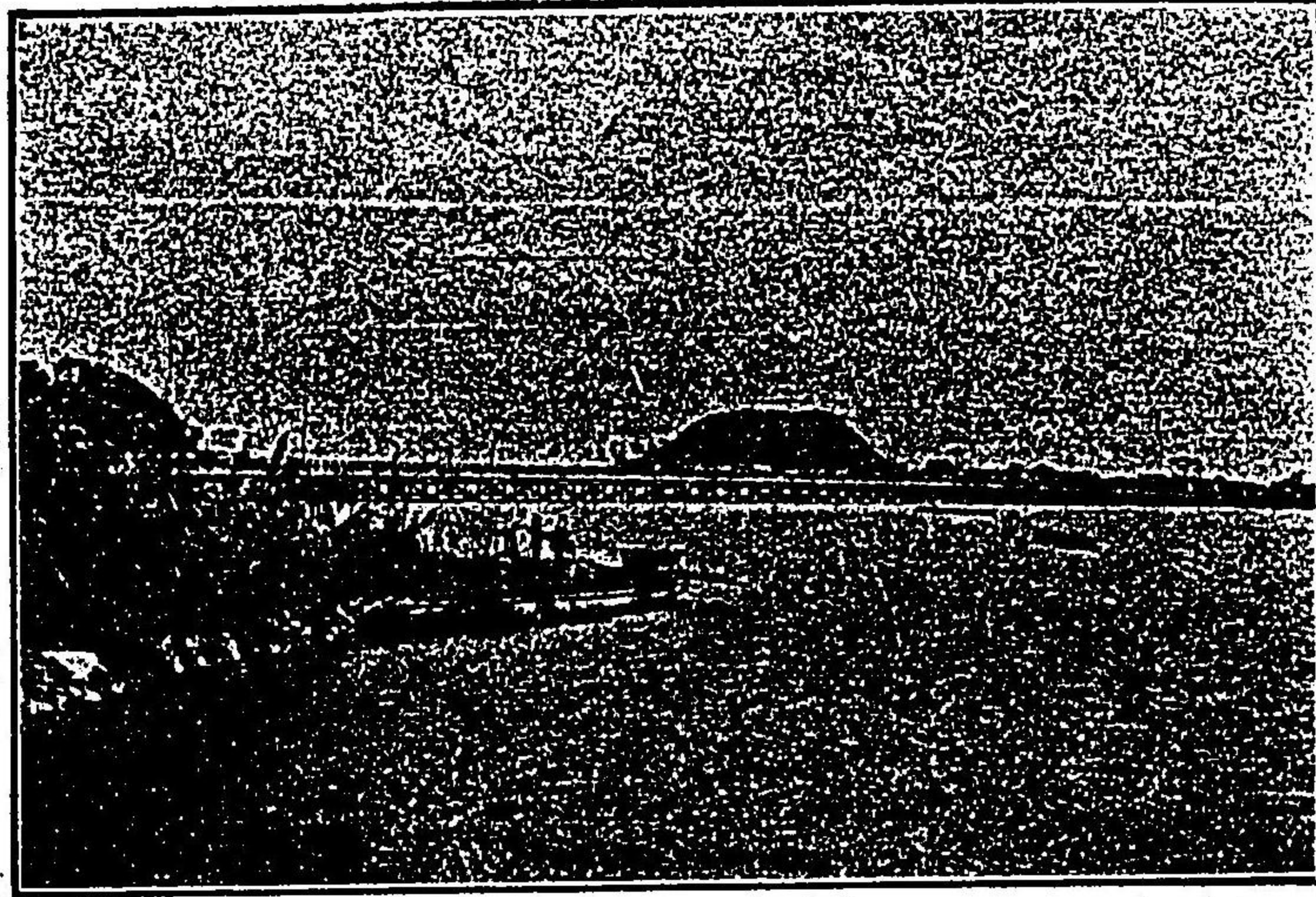
杉山今育評



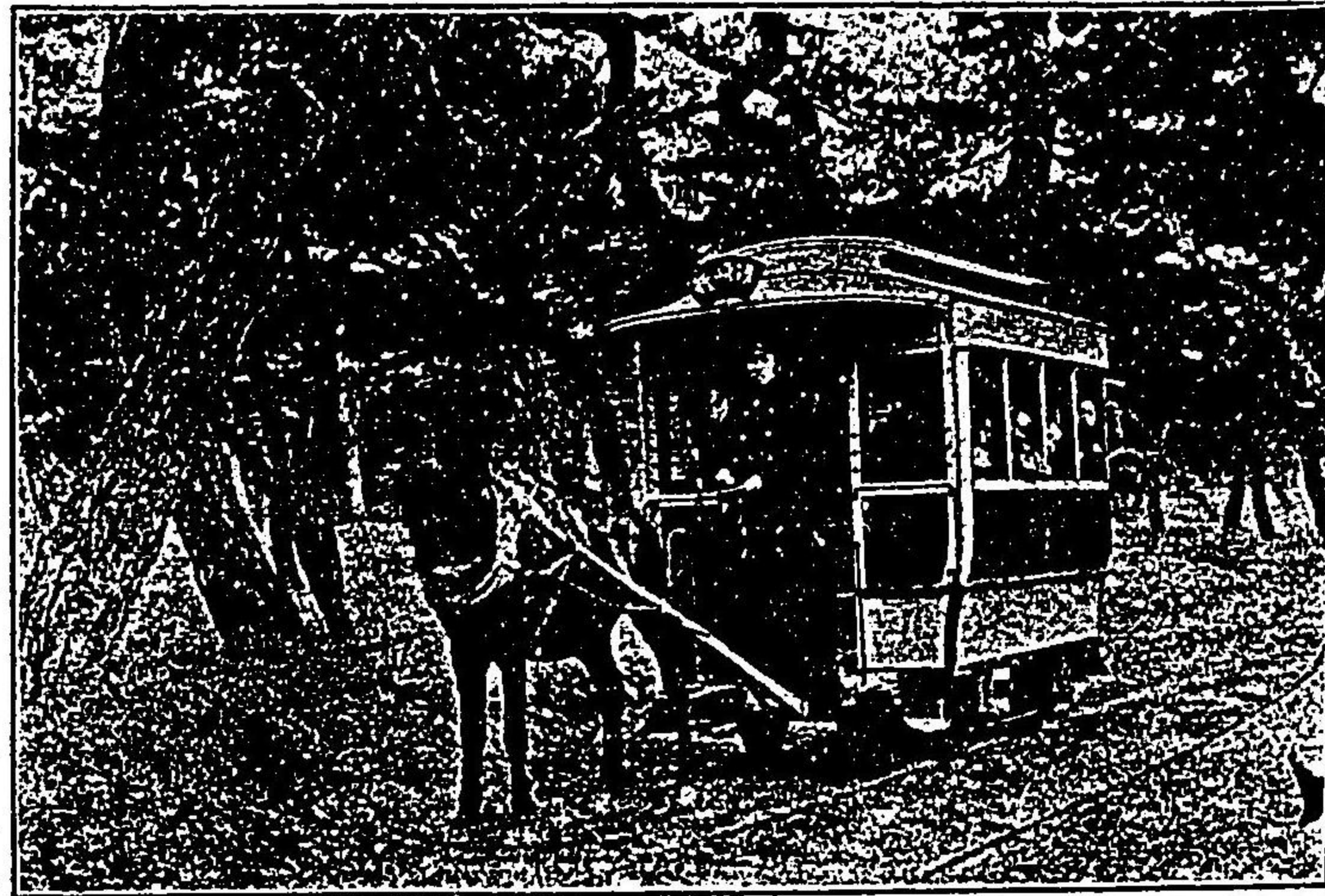
唐津西港
前ノ黒キ處ハ石炭堆積



虹ノ松原海濱院



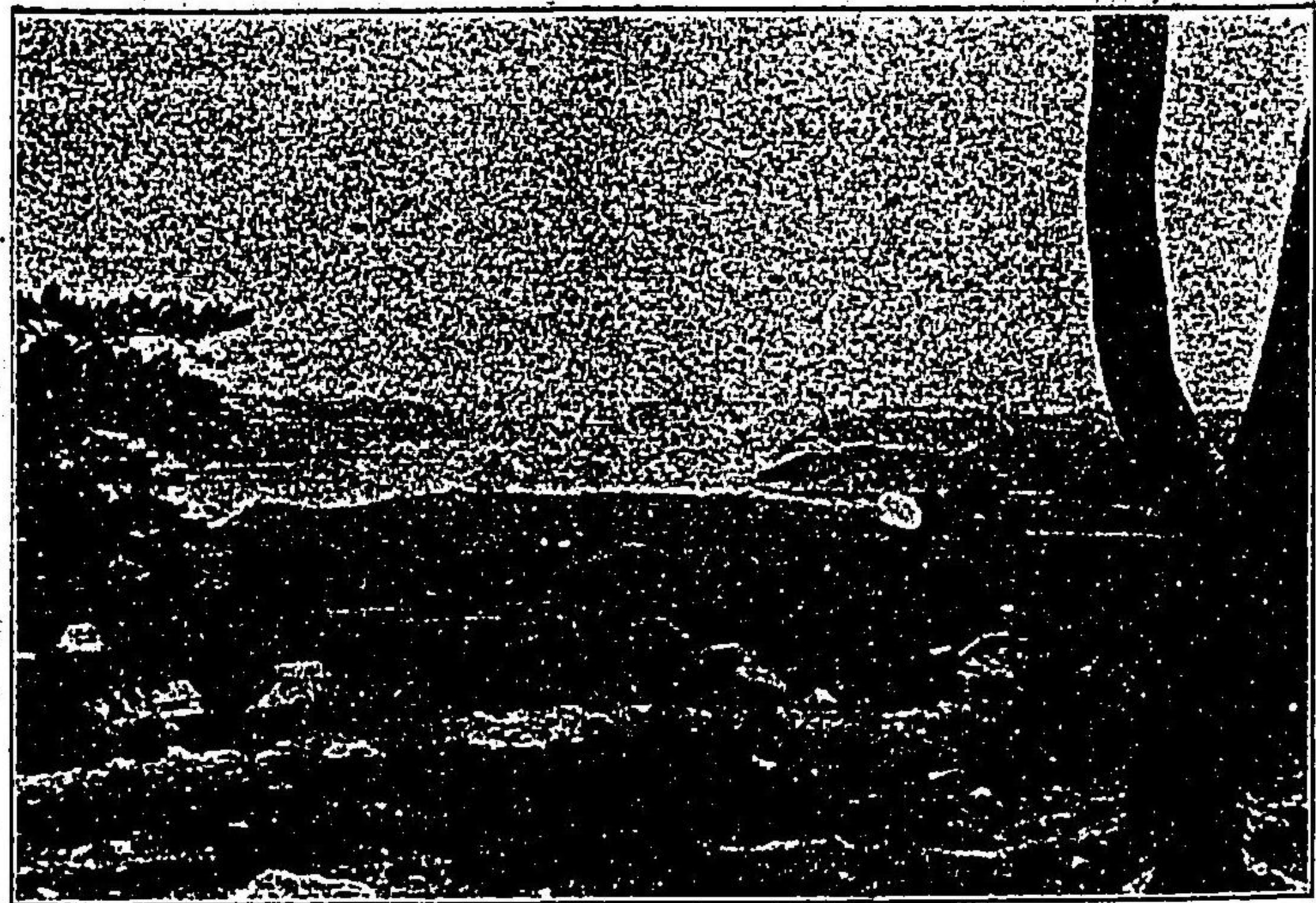
橋 浦 松



車 馬 道 鐵 原 松 ノ 虹



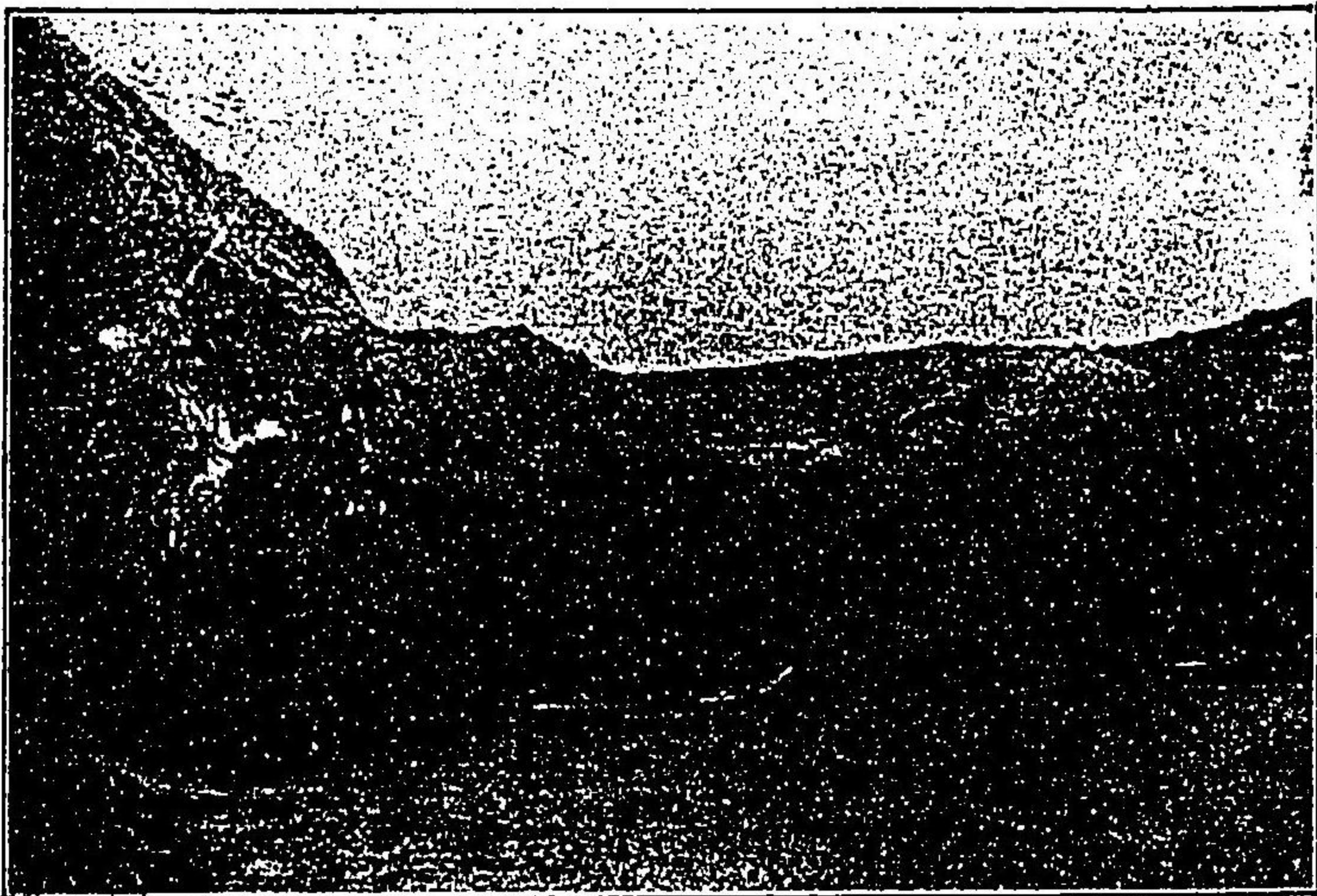
唐津公園



名古屋城頭ヨリ朝鮮近海ヲ望ム



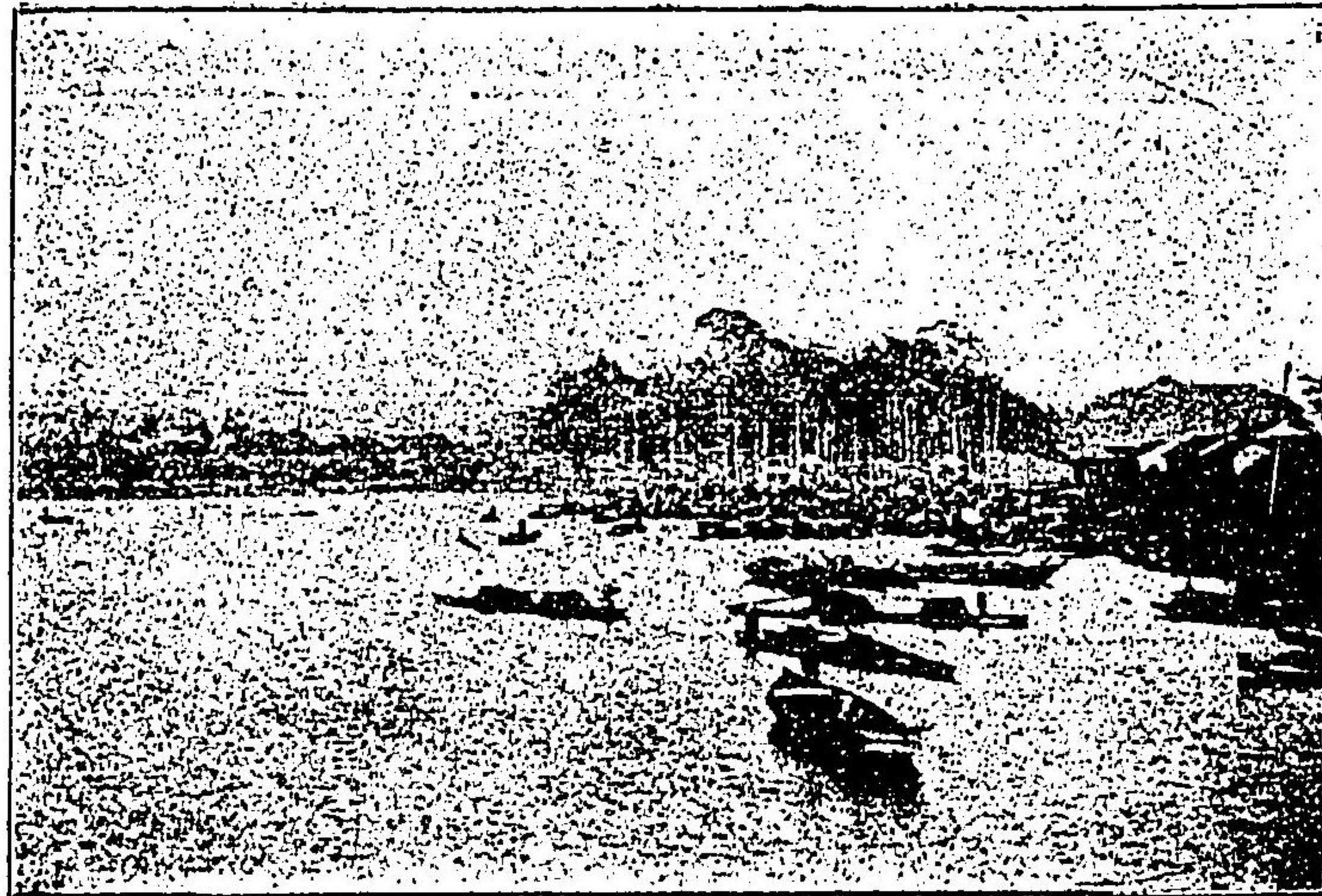
鐵蘇ノ愛遺公豊跡城古屋古名



釜ツ七崎器土



唐津神社祭西ノ濱御幸



唐津港川口



呼子港



諏訪神社



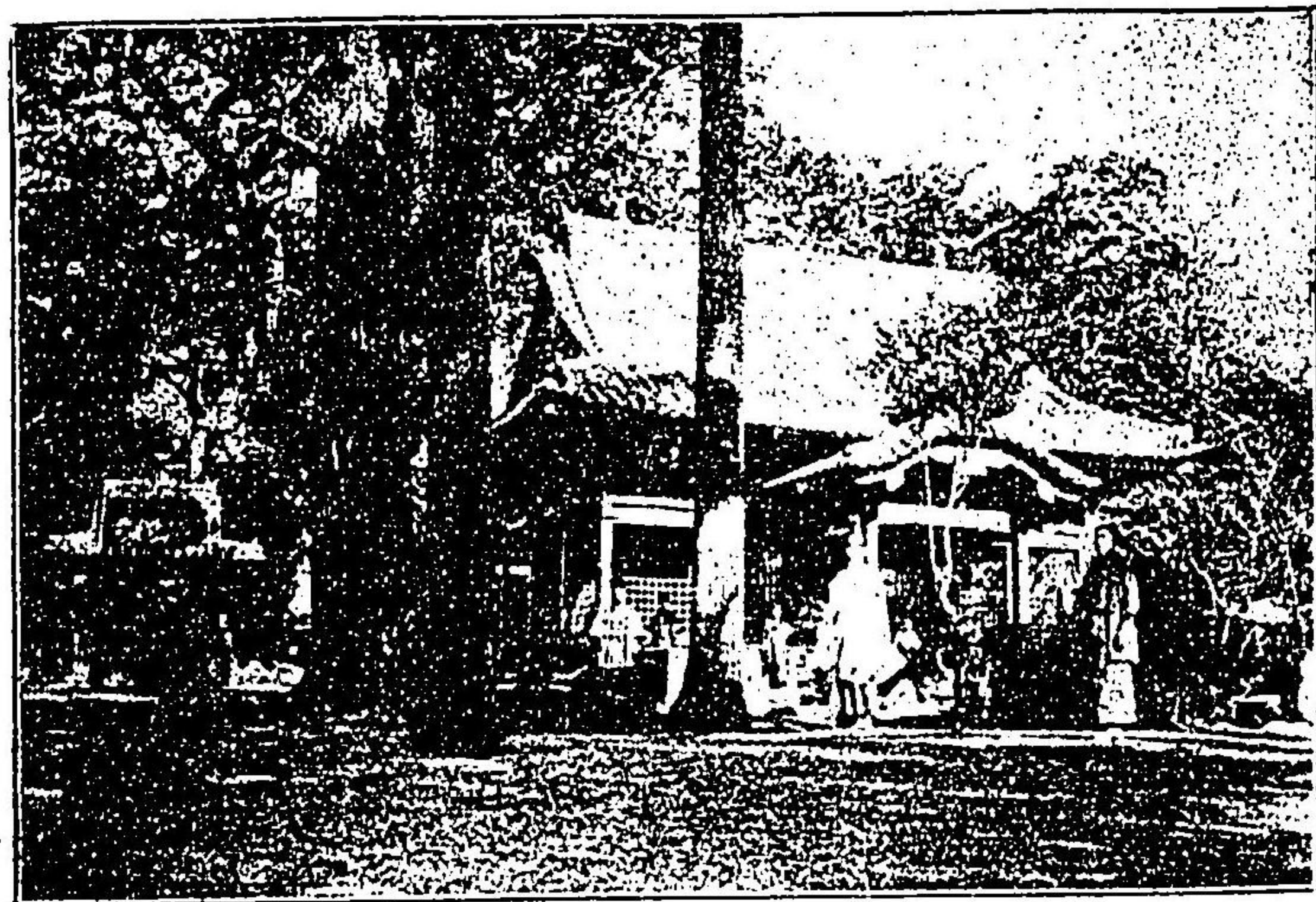
假屋灣



國幣中社田島神社



見歸瀧



大村神社



唐津町全景

唐津名所案内目次

中央之部

唐津港……………一

唐津町……………一二

唐津城址……………二二

唐津神社……………三三

法雲山龍源寺……………二五

清涼山淨泰寺……………二六

先石御茶屋……………二九

釜山海高德寺……………三〇

高城山法蓮寺……………三二

大石天満宮……………三三

東部

聖持院附日切地藏尊……………三四

柏崎及和多田の藤……………三四

瑞鳳山近松寺……………三六

唐津燒……………三六

松浦八景……………三九

領巾庵山……………四三

玉葛内侍土窟……………四六

鏡神社……………四六

洞源山恵日寺……………五二

赤水觀世音……………五二

虹松原……………五三

諏訪神社……………五五

玉島神社……………五八

玉島川……………六二

大村神社……………六三

鬼ヶ城……………六四

寶聚山功岳寺……………六七

猪堀瀧……………六七

白木水晶山……………六七

加茂神社……………六八

白山神社……………六八

子安神社……………六九

瀧観音……………七〇

満島遊廓……………七〇

南部

鬼子岳城址……………七一

垂玉……………七七

鎌倉岳……………七八

日生山心月寺……………七八

芙蓉山醫王寺……………七九

陣の山……………八〇

見歸の瀧……………八〇

熊野神社……………八一

妙音寺……………八二

鞆殿岩屋……………八二

佐用媛屋敷……………八三

西部

阿蘇大宮司惟直墓……………八四

假屋瀨……………八六

五郎十郎瀧……………九〇

入野眺望……………九〇

納所住吉神社……………九二

雌雄及白糸瀧……………九二

呼子港……………九三

湊疫神社……………九四

立神……………九五

土器崎、七ッ釜……………九五

神集島……………九六

潮音寺……………九九

醫王山東光寺……………一〇〇

佐志八幡宮……………一〇一

切木牡丹……………一〇三

小川島……………一〇三

田島神社……………一一三

名古屋城址……………一一六

以上

凡例

一本郡を四部に分ち唐津町を以て中心とし鏡村より七山村の間を東部とし北波多村より嚴木の間を南部とし而して佐志村以西の全部を西部と定む

一 一部内に存在する舊跡勝地社寺等は其主なるものを抜き之れを掲ぐ

一 社寺舊跡等の上に於て妄誕附會の説等往々免かれざるが如くなるも敢て今を以て古を矯むるをなさず暫く舊記に従て之れを録す取捨は看者其人に任するのみ

一編者淺識加るに商業の傍ら執筆せしものなれ
は敢て章句の修飾を求めず只に唐津港其物を
社會に照會せんこの微意に出しのみ請大方の
君子之れを諒せよ

緒言

諸子よ余は諸子の爲めに唐津を語らん諸子は今唐津材木町の中央を
以て起點せる鐵道馬車に乘じ松浦の長橋を渡りて滿島を經覽林の中
央なる海濱院の前に下車し敷丁を經て此山頂に達せしことを記憶せ
らるべし之れ即ち鏡山一名鱒振つなぎの峯にして山は諸子が眺望臺となり
松は諸子が天幕となり以て諸子が眺望の自由を援助しつゝあるをも
亦知覺せらるべし諸子よ請一管を喫して徐かに眼を四邊に放て
豈美なる山川に非ずや豈美なる風土に非ずや抑本郡は佐賀縣の西北
部にして北緯三十三度三十六分東經百三十度なり東西十里十町南北
七里十町なり而して其面積は廿六方里縣廳を距る十二里十三町にし
て一町二十ヶ村を包圍し戸數一萬六千にして人口八萬八千なり地租
は人口と其數位を等し地界西部は海水を隔て、長崎縣の北松浦郡に

二
向ひ東南は本縣西松浦及杵島小城の三郡と福岡縣糸島郡とに相接す
地勢東南より西北に傾き齊映東南に偏し炭田亦富めり西北は岡陵起
伏岬灣出入し平地殆んど稀にして陸産以て稱すべきものなきも海産
の利に至りては同地獨得の長所富饒敢て東部に讓らざるなり且寒暖
の如きは各部地形の如何に因ると雖も東南概ね寒冷にして南北稍温
和唐津は凡十七度二を以て平均とす人情も亦自から軒輕あり海岸及
鑛山の地は大抵輕躁にして義俠あり其他は概ね謹直にして勤勉なり
然れども恨くは民心概して貯蓄に乏しく或は奢肆に走るの弊あり蓋
し畢竟沃土の天幸然らしむるものか

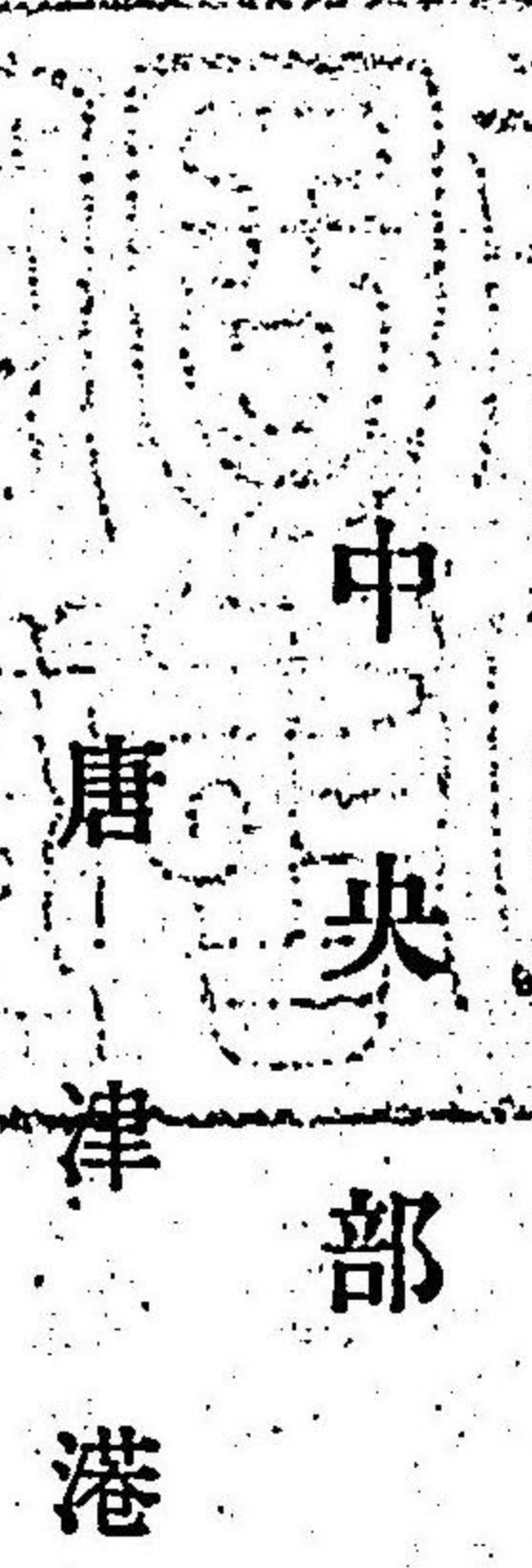
嗚呼形勝依然人逝矣拾來遺瓦附長嗟とは之れ名古屋城址の一句なり
遠つ人松浦佐用姫夫戀に鱗振しより生へる山の名とは之れ當山懷舊
の吟なり見られよ黒髮の峻峰を控へて低く左方に蟠るもの之れ岸岳
の城山なり山は往時を忘れて翠靄我れを迎に似たり一朝豊公の怒に

觸れて領土三萬を沒せし鬼ヶ城址は坐側右方浮岳の山腹にあり足利
の甘言を斥け誠忠將さに天を衝んとするも時に利あらず屍を野草に
曝せし阿蘇大宮司惟直の墳墓は後方天山の頂にあり鏡の宮は古木森
々玉島の川は水流洋々又眼を轉て北海を望め海中孤島の雪を頂くあ
り之れを烏帽子の燈臺となす其左なるものは神集島にして其左邊を
名古屋となす次は壹洲にして次は對洲なり於是乎諸子は如何の感か
ある瞑目一番往時を回顧せよ我朝國有て以來外邦貢を入るゝ實に神
后に始まる後の遠略玉島に決せしに非ずや我國の海國港灣少しとせ
ず然るに豊公一度輿を着るや陣を名古屋に構へしに非ずや英傑の見
る處古今一なり豈思はざらんや

今や社會一變昔日の斧鉞は今日の度量となり往時の壘柵は當時の船
舶たり請諸子暫く語るを休めよ今恰かも諸子が眼下に黒烟を殘して
馳るもの之れ九鐵支線が唐津西港に向て荷物を送るなり彼れが瀛瀆

車と客車の間に列ねたるは即ち石炭なり見られよ彼の西港に有て淡烟を吐きつゝある巨大の汽船は彼が齎らす處の荷物を待ちつゝあるものなり彼は其腹充ると同時に海外に向て波浪を蹴るものなり従て彼は諸子が望に應じ外國幾多の物産を齎すことを辭せざるなり加之九州全土の物産を吸収すると同時に復放散するをも辭せざるなり釜山幾何ぞや日百十里浦鹽幾何ぞや日五百海里餘今や西比利亞鐵道は成れり京釜線も亦近きにありと云ふそれ然り然らば所謂豊公の征韓其土に止らんや時か時か千里の馬東大陸の風雲を叱咤して凱歌をヒマレー山頭に揚んこと唐津を捨て將た何處にか求めん海陸の連絡彼れが如く風土の富饒また此の如し所謂住むに天與の樂土あり爲すに人爲の機鐵備る諸子感如何いでや之れより諸子が開戦の戦具品たる勝地舊跡物産工業の事項に就き曲さに案内の途を歩せん

唐津名所案内



唐津港は本郡の中部に位し唐津町及滿島に對し東は福岡縣糸島郡の北部一帶彎形をなして之を包み西は本郡西部の各村之れを擁して外圍をなし北は眇漫たる日本海面なり中に神集島高島鳥島等の小島あり港は自然に二區に分たる島嶼及水深の然らしむる處か而して甲は高島鳥島を以て北面の波濤を防ぎ松浦川流之れに注ぐ之れを東港となす乙は大島工みに海水を擁して大艦を繋ぐ九鐵支線爰に通す之れを西港となす甲乙共に水深く浪低く東港松浦川の便に依りて舟楫を通すれば西港漁笛を鳴して百貨を集散す頃日實業同志會に於て本郡

輸出入物品中價格一萬圓以上のものを調査せしに左の如しと云ふ

輸出物品

石炭 紙 魚類 大豆 米 蜜柑類 絹糸 肥料 瓦

輸入物品

米 酒 麥 素麵 砂糖 石油 煙草 吳服 小間物 鐵類
材木類 藥種 紙類 漆器 陶器 墨表 傘 下駄 杭木
セメント 書籍類 綿類 魚類 紡績糸 家具類 玻璃類
干物 鹽類 醬油 羅紗類

且九洲各港及馬關に於る貿易の趨勢を示せば左の如し

長崎	三、四一、六〇九	九、三三、六〇七
門司	一、二二九、八一三	七、二五、六三八
馬關	四、五、四一六	一、二一、四四二
	輸出	輸入

然して輸出品の主なる石炭及魚類に就き本縣の大体より聊か左に述る處あるべし

石炭 (明治三十二年の調に依る)

本縣に於て石炭を見出したるは遠く三百餘年前なりしと云左れど其頃石炭の用法不分明にて従て目立たる採炭事業もなかりしなり然るに維新以來其用法大に開け従て採炭の事業は是迄と打替りたる進歩をなし明治十八九年の頃には頗る盛大に赴きたり第一其鑛脈豊富にして目今の開坑數は已に二百餘區此坪數一千三百餘萬坪一ヶ年の採

博多	三、三三	二、五、〇二〇
唐津	一、一七、一三六	一、二五
津	三、七五、二八二	二、九、〇八三
嚴原	五、〇、一六九	一、三三、〇八〇
鹿見	二、六七七	二、五、一三
佐須奈	四、五、三七	三、三〇二

炭高凡拾億萬斤に近し盛なりと云べし産地は東松浦小城杵島西松浦の四郡にして坑數及採炭高も本郡を以て第一とす今郡内面立たる炭山二三ヶ所を擧て其荒増を示すべし

一芳の谷炭坑は北波多村字芳の谷にあり竹内綱外數氏の共同にて明治十八年の始業なり廿三年其第二坑を開き種々の洋式器械を据付け事業を廣め現今採炭に於て縣内第一等となれり此坑の起りは享保年間北波多村大字岸山字ドーメキと云處の田中にて或る農夫が耕作の折見出したるものなりと云

一相知炭坑は相知村大字相知にあり明治廿六年高取伊好氏の發見創業にして相知炭坑株式會社を組立しは明治三十二年九月なり越て三十三年十一月三菱合資會社にて譲り受け其事業を引續けり炭坑の内外萬般の手配等夫々備はりて益盛大に赴けり

一牟田部炭坑は芳の谷相知両坑の中央大字牟田部にあり明治廿三年

の始業なり三十二年牟田部採炭所之れを受續きてより種々の器械を備へ一般の改良を加へたれば是迄の面目を改め有望の良坑とはなれり

一失代町炭坑は始業の年月詳ならず種々の人失敗に失敗を重ね轉々變遷せしも目下田代政平氏の所有にして他坑に比し聊か規模小なりと雖ども出炭高の多きは田代氏斯業に經驗熟達の老練家なる所より斯くは盛大なる良坑とはなれり

右各坑の目今採炭高を調ぶれば一ヶ年間左の如し

一芳の谷 貳億五千餘萬斤

一相知 壹億貳千餘萬斤

一牟田部 一億萬斤

一失代町 八千餘萬斤

坑區坪數

一芳の谷現今採掘中の坑區は九十九萬百六十坪未着手の分尙三百十萬五千餘坪あり

一相知凡て二百六十萬七千二百四十一坪

一牟田部凡て五十萬八千二百四十三坪

一失代町 十萬五千餘坪

採掘法

一芳の谷はロングウォール式に依り主要の坑道兩側厚さ凡四十尺の炭壁を残し其外は悉く採掘し其舊跡は炭層の間に挟まれる土石又は粗惡の炭を以て埋む

運炭方法及仕向地

一芳の谷は九鐵支線山本驛迄私線を敷き採炭は悉く此驛に出し同鐵道にて更に唐津西港の大島に設けたる同會社の貯炭場へ送る其運賃は貨車二臺即ち十五噸に付參圓五拾錢とす併し積荷の高

に依りて特別割引あり

重なる仕向地は麻尼刺上海香港芝罘旅順及佐世保長崎尾張東京等なり

一相知失代町の兩炭坑は坑口より船積土場迄松浦川岸軌道を敷き六百斤入の炭車にて土場に運び之より上荷船の便に依りて唐津港へ積出す

一牟田部は坑口より凡廿町松浦川迄は運炭車に依り同所より舟便にて唐津港へ運送す近頃汽車便に依り唐津港へ送りつゝあり重なる仕向地は陸海軍御用及鐵道各會社其他長崎橫濱居留外國商人上海香港マニラ芝罘等なり

賣買手續

一芳の谷は外國輸出向は重に特約炭と稱して三井物産合名會社の手を経るもの多し其取引は唐津西港船乘直段により運賃海上保

險等には一切關係せず又折々直接積送りをなすとあり其取引は時々の約束に依る内地向は粉炭又は下等炭にして重に京阪地方の需に供す其取引は通例唐津地方の間屋にてなすを仕來りとする尙其直段は船積の時取定め仕切勘定をなす併し時としては直接京阪地方へ積送るとあり又特に各軍港の御用炭に積送るとあり地賣は(港口受渡)凡て現金取引にして其他は現品着の上爲換にて送金するか又は荷爲換法に依るとあり其他所約定先送りとするも積出の時凡半金を受取置とあり

一相知は三菱會社長崎支店にて販賣す

以上炭坑々夫數如左

一芳の谷 男千二百八十七人 合一千二百七十八人
女四百六十三人

一相知 男六百廿一人 合八百三十八人
女二百十七人

一牟田部 男女合千二百人

一失代町 男女合千人

坑夫賃金

相	鐵器	採炭	採炭	芳の谷		
知	械工	外夫	内夫			
	男壹圓	男四拾四錢 女廿九錢	男壹圓 女七拾錢	普通	六拾錢	最低
	四拾貳錢	參拾八錢 廿參錢	四拾錢		參拾錢	
	參拾六錢	拾參錢 拾八錢	拾九錢		拾九錢	

坑 夫 壹圓參拾錢 五拾錢 參拾錢

右の外蜂の巢、岩屋、大光、柚の木原等數坑ありと雖も之れを略す蓋し事業の振合大同小異なればなり

魚類及食鹽

本縣内にて魚類の本場を唐津伊萬里及呼子とす元來此港は一方日本海に向ひ漁船の出入甚だ宜しく又一方は國道縣道鐵道等相通じ車馬運送の便利至て開け居る故古來此地魚類の出入は特更多かりしに文政の頃より朝鮮近海へ出で、漁業を營むに至り其捕漁高は俄かに増加し其後年々盛大に向ひ近頃にては遠く京阪地方に迄輸出するに至れり

魚類出入高

魚類は年に依りて多少の増減あれども大低當地に於ては一ヶ年卅五萬圓餘呼子にて廿萬圓餘の取引をなす

漁場

漁場は松浦海沿海及朝鮮近海にして魚類の主なるものは

鯛、鯖、鰻、鱒、鱈、鱈、烏賊、鱈、秋刀魚、及鯨等とす

販路

當地方の外は佐賀久留米柳川熊本白石等を始め遠く他方に送るとあり

賣買手續

賣買は當地にては魚合資會社ありて其賣買の取締をなす故に一先此地に集む魚類の會社に着くや之れを仲買商に競賣し仲買は諸方の注成品を買入れて販賣の業をも營む呼子も當地と大低同し

荷造法

は大低籃入又は蕙包とす一箇の荷造賃錢は凡四錢内外なり

唐津製鹽會社とて高島西の端にあり此高島は唐津東港の口に横はり

し一島にして周回三里從來高島鹽の産地にて品質の善良なる鹽なり
しも取締の不完全なりしより漸次粗製に流れ遂いに信用と販路を失
ふに至りしを地方の有志之を慨嘆し一大會社を起し蒸氣製鹽器械を
備へ付け海水を蒸氣力に依り一晝夜五十餘石の食鹽を製出し前途有
望の事業にして現に縣郡費の補助を請け益々事業を擴張しつゝあり
爾來唐津鹽の社會に名聲を博するを期して疑を容れざる處なり

唐津町

唐津町は唐津港の南岸松浦河口にあり東西三十丁南北十丁十九町二
千五百戸より成る其町名左の如し

- 京町 紺屋町 平野町 新町 刀町 吳服町 本町 中町 米屋町
- 木綿町 八百屋町

以上を内町と名く

- 魚屋町 大石町 材木町 水主町

以上を外町と名く

外に舊郭内外に舊藩士族の住居せる小路數十町あり之れ皆當時唐津
町に屬す町内に散在せる著名の會社商店等大略左の如し

- 一 郡役所 舊郭内字柳堀側にあり
- 一 海港檢疫所 同郭内
- 一 警察署 同
- 一 監獄署 同
- 一 裁判所 同
- 一 小林區署 同
- 一 唐津病院 同 院長 古川 俊
- 一 養生院 新町字切通 院長 峰谷 元壽

一 佐賀縣第三中學校 舊城本丸にあり

一 郵便電信局 京町にあり

一 九鐵支線唐津停車場 京町裏にあり

一 税關 満島にあり

一 稅務署 材木町にあり

一 魚市場創立明治六年 同上 社長 大島小太郎

一 唐津石炭合資會社 郭内公園地にあり

本社は石炭販賣業にして各坑主の共同に係り社業の盛なると當地第一に位す社長は河村藤四郎氏なり

一 唐津物産株式會社 同上 社長 山内喜兵衛

石炭販賣業にして明治二十二年の創立に係り兼て清國露國の各港及米國等へ輸出しつゝあり

一 唐津銀行 大石町 頭取 大島小太郎

資本金五拾萬圓積立金廿萬圓創立明治十八年

一 西海商業銀行 木綿町 頭取 山村直太

資本金拾萬圓積立金五萬圓創立明治三十一年

一 唐津貯蓄銀行 本町 頭取 草場猪之吉

資本金參萬圓積立金壹萬圓創立明治三十年

一 芳谷炭坑株式會社 唐津停車場際

社長 竹内 綱

一 廻漕店 材木町 店主 平松定兵衛

日本海上運送保險會社代理店 金庫特約販賣

一新大和屋書店 京町 店主 牧川德治郎

學校用書籍 文房具 体操諸器械 度量衡器 風琴各種

旅館

一 博多屋 紺屋町 店主 山口重吉

一大和屋

大石町 店主 牧川茂太郎

一岩井屋

本町 同 岩井惣太郎

一新岩井屋

本町 同 脇山茂助

一菊屋

刀町 同 石崎靖夫

一壹岐屋

京町 同 麻生榮太郎

一扇屋

相知驛 同 富永仁助

一萬壽屋

濱崎驛 同 櫻井久太郎

一中住屋料理店

中町 同 筒井滿太郎

本店は佐賀縣内人氣投票の折第一等の多數を占たる地方有數の割烹店なり

吳服太物店

一宮崎吳服店

魚屋町 店主 宮崎治三郎

一山内吳服店

魚屋町 同 山内吾兵衛

一中島吳服店

魚屋町 同 中島甚兵衛

一草場吳服店

魚屋町 草場合名會社

一魚吉吳服店

魚屋町 同 三根福太郎

其他二三ノ吳服店各所にあり

酒舖

一小榭屋

大石町 店主 野口安太郎

榭壽 初日の出 花娘等の銘酒醸造元

又日本酒造火災保險會社代理店をも兼たり

一酒井屋

江川町 店主 藤生 誕助

旭鶴 松浦 横綱等の銘酒醸造元及明治生命保險會社代理店

一牧野酒店

刀町 店主 牧野留五郎

笹の雪、韓陽領巾振等の銘酒あり

一西の木屋

魚屋町 店主 山内小兵衛

銘酒并に醬油醸造兼業あり

雜貨店

一岸川商店 魚屋町 店主 岸川善七

烟草 砂糖 石油 大豆粕等あり

但東雲烟草は一手專賣なり

一多久島商店 魚屋町 店主 多久島利助

和洋小間物卸問屋洋食器具一切

一平田屋藥店 魚屋町 店主 草場猪之吉

藥種一切 度量衡器 醫療諸器械 朝日ビール一手專賣

一渡邊洋服店 京町 店主 渡邊賢助

洋服裁縫業

一平田屋鐵商店 京町 店主 草場猪之吉

炭坑諸器械 船舶用材 各會社御用達

一辻藥店 大手口 店主 辻喜一

藥種一切 化學用藥品

當地第一福印ラムネ製造元

一高崎金物店 刀町 店主 高崎和三郎

鍋釜釘大工道具等金物一切

大阪セメント特約專賣 度量衡器等あり

一水頭商店 紺屋町 店主 水頭治平

米穀仲買商及炭坑用品用達店

一宮崎材木商店 材木町 店主 宮崎徳治郎

材木一切 土木建築請負業 汽船問屋兼業

一山本時計商店 新町 店主 山本辰太郎

一宮島商店 水主町 店主 宮島傳兵衛

銃砲火藥 淺野セメント 醬油醸造 度量衡器

札幌ビール及石炭問屋業にして公園地に支店あり

一山崎醬油店 満島 店主 山崎常藏

唐津貯蓄銀行代理店及廻漕業

一吉井商店 和洋小間物商 店主 吉井市郎兵衛

支那鞆製造鮑熊印燐寸特約販賣

一大和屋藥店 大石町 店主 富永盛太郎

諸賣藥藥種 洋酒 防水布特約販賣 自轉車附屬品并に修繕

一大和屋陶器店 大石町 店主 牧川茂太郎

各國陶磁器卸商 孟印入調進所

一古館酒店 米屋町 店主 古館正右衛門

太閤醸造元 大阪石崎醸造澤の鶴其他銘酒特約販賣

一唐津新報社 京町にあり

當地實業家の機關新聞なり

一演劇場舞鶴座

大石町にあり

唐津城址

唐津城は慶長年間豊公征韓凱旋の砌波多領八萬三千石を沒收し天草領三萬石を加へ都合十二萬餘石となし之れを寵臣寺澤志摩守に與へられたり後大久保二代松平三代及水野小笠原諸公の封せらるゝ處となり其高漸次減少して維新奉還の際は六萬石となり居れり始め寺澤廣高の城を築くや工を慶長三年に起し同十三年に竣る用ゆる處の木石は領内名古屋の行營不用に屬せるを以て之れを拜領し船積となして運致せるものなり本丸を満島山と云ひ元と満島と地續にして今の川口を滿切と唱へ松浦川は本丸の西を流れて西の濱に出たり城郭周圍殆んど一里巧に潮水を導て不虞に備ふ四門を開き二橋を通ず曰大手曰西門曰水門曰埋門之れなり橋は大手及二門とす今唐津區裁判

所の左角なる大手橋を渡り唐津病院前より左折して第二の堀に到るの間之れを大名小路と名て城中の大路なり其第二門を過ぎ東二丁許にして牙城に達す今第三中學の在る處之れなり外溝別に内町の西南停車場の邊りを繞れり衣干、丈高の二峰西南に峙ち浮岳の高嶺遠く本城の鬼門を塞ぎ江海東北を擁して山河襟帶一の堅城たるを免れず今や犬に荒廢に屬し僅かに舊時を窺に足るのみ

此城地形寛松原は延て右翼となり西の松原又左翼を張り鳥島頭となり(舊時海峽なりしと云)郭内咽喉に膺り市街腹部を成し松江の堤松長く両脚を延して以て宛然たる天工の雲鶴舞鶴城の名因て起る所以なり

城頭一の公園あり唐津公園と名く疊壁辛く存するの間桃櫻の配置其宜しきを得嬋娟たる容姿は舊時を忘れて爛熳恣に相香ひ楓葉所々に繁りて秋の遲きを怨み眼下帆檣林立して亦別界の境遇を示し天主屹

として往時の歴史に瞑目せしめ老少相戯れて歸るを忘れ文人筆を投じて山河の烟嵐に咽ぶ白砂の回りて海水と相映するは晴れざるに何の虹ぞ白帆の長江に來往するは翼なきに何の鳥ぞ河水洋洋々として流れて城脚を洗ひ潮風緩く來りて徐かに樹頭を櫛り夕陽の浪に荒は人なきに何の綾ぞ漁舟の棹歌を交ゆるは席なきに何の宴ぞ所謂覽林晴嵐、満島夜雨、新堀歸帆、龍源寺晚鐘、千年塚夕照、鏡山秋月、浮岳暮雪、和多田落雁、皆之れ指呼の間にあり亦一の佳境なり

唐津神社(郷社)

唐津神社は唐津舊城郭内にあり住吉神を祭る境内凡八百坪土段土塀を回らし本殿拜殿等各其位地を保ち遠木高く砂白く人烟稠密の間一の偉觀たり縁起曰

當社は往古神后の奉安せられし社なり其緣由を原ぬるに皇后征韓御

發船に方り西海茫茫として涯なく、舟師向ふ處を知らず時に皇后住吉神に祈誓して日神若し吾をして新羅を征するを得せしめ給は、願は一條の舟路を示せ吾依て以て師を進めんと我朝固より神國なり神靈豈顧みさらんや妙なるかな海上忽ち光輝あり皇軍を導くものゝ如し皇后依て舟路を得遂に能く三韓を征服す皇后神徳の著しきを感じ給ひ凱旋の後鏡を捧げて松浦の海濱に住吉神を祭り給ふ是則唐津神社なり後ち星霜を経る年あり従て祠殿も亦敗類に屬せるものか孝嫌帝の御宇に當り神田宗次なるものあり一夕神夢を得て海濱に至る忽ち一筥の波に浮ひて來るあり之れを開けば即ち神鏡なり且驚き且敬ひ其靈位を惟み之れを時の帝に奏す朝廷神徳を感じ特に詔命を下して號を唐津大明神と賜ふ實に天平勝寶七年九月廿九日なり陰曆九月廿九日は毎歳の祭日なり神輿は字西の濱に渡御の途次各町を巡幸せらる此日の見物とも云ふべきは曳山とて各町より曳出す處

の山鉾之れなり山鉾とは鯛又は獅兜等を形る張貫の模造物にして高さ三間巾之れに適ひ粉色工みに施され金光燦爛として構造精緻を極む臺數合十三町内の老少群をなし亮朗の音堂々の響と共に神輿に従て曳き回すこと之れなり爲めに各郡市の參觀一層の多きを加へ祭事の盛なること縣内第一とす

法雲山龍源寺 (曹洞宗)

本寺豊後國泉福寺

開山應永三十年二月十四日

開祖融能大和尚

當寺は唐津町字東寺町の南端にあり特に退て丘陵に憑る杉高して石低く前面一帶白堊を環らし門前橋を架して風致を添へ庭中處として花卉ならざるなく樹蔭處として苔ならざるなし山僧箒を採るの朝梵

鐘一たび響の夕真如の月は樹頭に懸りて能く俗情を外脱せしめ誦經の聲は法海に湛て工に苦行の舟を浮ぶ禪橋渡る處法ならざるなく法門越る處空ならざるなし清幽の韻致述るに言なく真に松浦八景の一勝地たるに脊かざるなり

清涼山淨泰寺 (淨土宗知恩院派)

本尊阿彌陀如來 御丈二尺九寸

此佛慈心僧都其慈母孝養追善の爲め一夏九旬の際一
刀三禮して彫刻し奉られたる靈像なり

開基天正十五丁亥年

開山實蓮社眞譽上人

建立施主寺澤志摩守廣高

抑當寺は波多三河守上洛の折我領地は邊鄙にて人心質朴ならず邪惡の民多ければ攝家濟度の爲め又は我子々孫々の守護佛として祀るべ

しとて請ひ受け來り神田村山口と云處に納められしが名古屋陣にて寺澤越中守歸依の餘り同地に移されたり子志摩守家督し兩親の尊信せられたる佛なればとて亡骨と共に此地に收め法名を

勝巖院殿看譽淨泰禪定門

と號し淨泰の二字を取り寺號とし本堂方丈庫裡等形の如く造營せられたり此寺大猷院殿より五十五石の御朱印地あり

爰に靈妙なるは波多家の代官池田帶刀と云者此地を守りしに波多家より寄附されたる田地肥田なりければ之れを惜み庵末の田地と取替て佛田となし居りたり然るに早苗取る頃毎夜童子の足跡にて右の良田を踏み荒せり夜陰に番侍を附けて窺はしむるに一人の小僧出て、田の中に入る番侍等箭を放つに手答はしたれども其人なし足跡を辿り此寺に來り尋ぬれども疑ふべき廉なし不計本尊を見るに佛像の裾に泥土着き又た左の脇腹に彼の箭深く射込て立ければ皆々膽を潰し

罪科を懺悔して箭を抜き取たり今に其箭跡残り依て俗に箭負如来
 又は泥付本尊とも云へり又慶安二年五月にも本堂の瓦一度に落て騒
 し時本尊は早くも塀の上に御遷坐なり居りたり又的譽上人の弟子
 に單歴と云者誦經の折沈睡し居りたれば鼠色の衣を着たる老僧來り
 て扇を開き煽き給ふ小僧は涼さに目を開き老僧を見て恐怖しければ
 老僧忽ち佛壇に馳せ登り本尊と団体になられしと云又轉譽上人元祿
 年中の頃春雨車軸の如く降りたる折本堂より頻りに手を鳴らし呼者
 あり往て見れば別に人もなく佛殿の上屋根板腐れ雨洩り岸の崩るゝ
 如し僧侶等右拍手は如来の御告ならんと甚と難有覺へたりと云如此
 靈佛なるに依り二百餘年の今日に至るも寺門衰へず師壇繁榮なるこ
 と尊佛不思議の高徳なり未法萬年の燈明かにして利物偏僧の御利益
 誰か信せざらんや中にも此寺は南都北嶺の伽藍を形とり聖武桓武の
 靈徳に習ひて此地に造立し給ふ精舎なれば國家安全四民豊饒にして

現世安隱後世菩提の道場なり特に當寺は安田作兵衛天野源右衛門と
 稱し世を忍ぶの際當地に滞在遂ひに死亡則ち遺骸を埋葬せる處にし
 て其墳墓と織田氏を突きし鎗とは今に存して懷舊久しからむ

先石御茶屋

は鬼塚村にして唐津町の南端先石きいしにあり故唐津領主大久保加賀守の
 設る處今衣川某の寓に係る請て一茶を試んも亦妨げなかるべし
 當地は松浦川まつらの下流に屬し水邊に設けたる一室なり東方遙かに浮岳
 の高嶺を望み前面は鏡山及作禮の諸峰蟠廻障壁をなし左りに寛林の
 綠を控へ右に岸岳の古城を眺め後は阜丘之れを塞き眼下清流の汪洋
 として漲るあり水中奇巖特立し巖上老松の蟠植せるあり就中ひと
 とすゝきは特有の名草世上の賞賛博し此石所謂松浦岩にして俗説を
 佐用姫の足跡ありと云もの之れなり中流白帆の往來するは石炭を運

ぶなり岸邊輕舟の馳驅するは投網の鯉鰈を漁るなり一綸の汀に垂るは風月を樂むなり半身の水に没するは松浦蜆を堀るなり鳥は大空に翻り魚は波上に躍る春曉一度戸を放んか烟霞靄々四山に滿ち秋夜一たび舟に棹んか玉兔玲瓏波心に落つ古歌に

沈めけむ鏡の影や之れならん松浦の川の秋の夜の月
 之れ郡内得難きの勝地候伯の茶寮として耻る處なきなり

釜山海高德寺

本尊阿彌陀如來

淨土眞宗

本寺東本願寺

當寺は唐津町字中町にあり織田家の臣奥村掃部永享三年遁世して僧となり本願寺六世教如上人を師とし七世存如上人のとき迄從ひたり

立了と號す親鸞上人九十才にして遷化し給ふ教如上人其影像を寫して立了に授く立了唐津に來り寺を開き高德寺と號す開山上人の畫像今に此寺にあり又奥村掃部の子小源太其子小藤太と云もの掃部より傳へたる一寸八歩の金佛と開山上人九十才の影像とを持傳へて顯如上人の弟子となり諸國を巡廻して松浦に來り天正十一年此所に高德寺の一字を建て顯如上人より授りたる本願寺御内佛の本尊を移し奉り尙朝鮮國に渡海し同國にて戰死者の靈を吊たり依て太閤より釜山海の寺號を給と云ふ太閤より拜領品舊記に依れば如左

五味茶釜

金銀鐵錫銅五品鑄交なり

金砂茶碗

古高麗燒なり

梅繪高麗燒茶碗

クワンニウ也

ルスの壺

大古物の由

金屏風

壹双

繪は燒及笹の齋持野元信寫
縁は蜀紅の錦花桐模樣なり

堆朱香盆

右の外軸物等夥多ありと云

高城山法蓮寺

本尊觀世音 御長一尺二寸

開基遠城院日親聖人

本寺房洲小湊誕生寺

此寺元と石志村高城山にありたるを大久保加賀守唐津城主たりしとき東寺町に移し同家の菩提寺とはせられたり此尊像は土井侯の臣井上新右衛門の施主なり或る時此佛を盗み奉らんとするものありしに其夜頻りに眠を催し夜明て目覺めけり翌晩は用意して霧より風呂敷に包み出奔せんと覺悟せしに又其夜不思議にも風呂敷は元の儘にして尊像のみ佛壇に直り給ひければ此者懺悔して寺を去りしと云

日親尊像法弟日儀作と尊像の後に銘せり
當寺代々聖人紫袈裟紋白免許にして寺格最よしと云三寶祖師四菩薩四天王等波多三河守母公の寄附なりと

大石天満宮 (村社)

當社祭神は菅原道真公にして慶長年間唐津築城の際今の城山より移されたる御社にして市街に接する阜丘の上にあり是則ち唐津外町の鎮守神なり社殿は總て太宰府の本社に模し結構甚だ至れり今假に一望を試みて東都愛宕山に比せんか全都紅塵の巷は眼下の市街なり墨田の洋々たるは松江の流なり兩國の波に浮は松浦の長橋なり上野の春霞を漂するは舞鶴の公園なり東天筑波の下しは浮岳の雪吹なり品海の月を弄するは西港の漣波なり新橋の流笛を鳴すは丘麓の鐵路なり北郭不夜城は満島の妓樓なり此景此色畫て成らず傍ら一勝地たる

を免かれざるなり

聖 持 院

(東寺町 眞言宗)

日限地藏尊を境内に安置し本堂は名古屋城より豊公の居間を移したる建物なり處々の彫刻建築法美術を極め今より古を伺ふの人必ず此處に枉駕せざるはなし邸内に培養せる躑躅は朝鮮より移植したるものと云ひ花時は頗る見物たり毎月四の日は日限地藏尊の縁日にして諸方より賽客絶へず蓋し此地地藏尊諸病諸災を悉除し凡ての祈願一として叶はざるなしと云ひ囃せり

柏崎及和多田藤

柏崎かしわざきの藤は久里村大字柏崎嚴島神社々前にあり鬼塚停車場より東方凡廿丁許なり老幹一株にして凡三十坪の廣さに涉り莖の長さ三尺許

盛りかきの頃一度此地に赴けば恰かも天女の瑤落を掛しにはあらずやとまで疑はるゝ計りなり

又和多田の藤は唐津より鬼塚に到る鐵道線路の傍なる田圃の間にあり是れ則ち和多田天満宮の藤にして御鳥居の内左右の両側に埴へ付けられたり根株は數本にして蔓は遠慮もなく延び涉り垂下凡四尺紫の色は緑の若葉と相匂ひ時を得顔に咲き乱れたる有様は昔し藤原家の世盛りも如此やと計り思ひ起されたり左は云へ風骨神仙霜雪に花たる老梅の彼方の方に凜然生ひ繁れる風勢は中々に比ぶべくもあらず藤は如此榮華に驕れども風雨一度吹き荒まば花は忽ち揉み碎かれ訪ひ來る人もあらざるべし驕るもの久しからずか聞傳へり嗚呼浮世なるかなと心ありげに祠前を拜み歸る人もあるなるべし當時此藤等地方屈指の藤なり

瑞鳳山近松寺

臨濟宗南禪寺派

開祖耳峰大和尚

開基慶長四巳亥年九月十六日

大旦那寺澤志摩守廣高

御朱印高百石

當寺は領主小笠原家の菩提寺にして寺格郡内に冠たりと云又有名なる瑠璃の元祖近松門左衛門の墳墓境内にあり目下其紀念碑建設の企あり諸方の有志併優者の賛成多く不遠一大紀念碑の聳ふるを見るまた疑ひなし

唐津焼

窯地は御茶碗窯として唐津停車場近傍にあり

唐津焼は我國に於る唯一の古き沿革を有する陶器にして上は神后以

來歴代の天子より下は侯伯に至るまで本品を珍重し維新當時に至る迄御用竈として唐津城主の獨占事業に屬し妄りに人民の製造を許さず且之れが買買を禁じ専ら貴族社會の使用に止りたり蓋し其最も古き歴史を有すると共に實に唐津焼の高尙雅致にして一種云ふべからざる風韻を保ち使用するに従て益々變化極りなく茶器として好合なるのみならず其製造の敷少きを以て従て其價の不廉は本品を珍重せしめたる所以ならんか去れど今は此著名なる陶器も僅かに餘喘を止むるに過ぎずして物産として掲るの限りにあらずと雖も往時名窯の聲價を没するに忍びず爰に其製品の種類を語らん

世人の唱る處の唐津焼の陶器に數種あり米量（よみ）と云は元享年間に製せし處のものなり陶膚に薄釉を施す而して潤澤なし根拔（ねぬき）と云は建武より文明の間に製せし處のものなり其質白土あり赤土あり其釉は鉛色にして臺輪の内に縮緬の緞の如く縞狀の土質を露して釉を施さず人

甚だ之れを賞す奥高麗と云は文明より文正の間に製せし處のものなり此際點茶盛に行はれ高麗の茶碗を珍愛すと雖も舶載のもの少くして得易からず故に唐津に於て模造せしめたるものにして陶膚稍密釉色枇杷實の如く又青黄のものあり又輪臺の内に皺紋あるを以て良とす以上三種を古唐津と云

瀬戸唐津と云は應仁より天正の間に製せし處のものなり尾張瀬戸の釉水を用ひ故に此名あり白土にして濃白色釉を施し龜紋の劈痕甚し繪唐津は慶長以降の製造に係る茶碗盞等の雜器多し其質赤土にして青黄黒を兼たる釉を施し最も潤澤あり繪は草畫なり朝鮮唐津は天正より寛永年間に製する處のものにして朝鮮の土及び釉を用ひて製す故に火斗ヒツの稱あり蓋其原料及工人皆他邦のものにして只火のみ本國のものなりと云ふ意なるべし土質赤黒にして青白を雜へたる釉を流布す水壺杯盆等多し堀出唐津は寛永より享保の間に製する處のもの

なり陶質堅く青黒を負ひたる釉色にして臺の土質を露すあり露はさざるあり其臺輪の内に皺紋あるを以て良とす而して其形多くは正圓ならず其堀出と名るものは火候度に過き或は窳み或は欠損するものありて工人之れを不用となし土中に埋めしを後世に至り堀出得て之れを賞し以て名となす是を以て其埋らざる全備のものも此器と同様なるものは凡て堀出と名るに至りしと云以上の四種を唐津の名物となす土は本郡有浦村字牟形及西松浦郡笠椎村より出す此土質韓土に異らずと云

松 浦 八 景

(或る書に見へたるまゝ)

江城夕照

影遠く寫る夕日の清き江に光を添る玉の高殿

吉井晴嵐

吹拂ふ嵐も繞む夕去ばよしや吉井の雲の浮岳

鏡山秋月

鑄振し昔の人の面影も寫る鏡の山の端の月

松浦川夜雨

打寄て返る並木の松浦川音社別れ夜半の時雨に

入野暮雪

日も早く入野の末の夕映を月に不讓雪の色哉

綿田落雁

夕月の影を愛てや白妙の綿田の面に落る雁

遠寺晚鐘

山深く尾上に響音す也霞をくゝる入合の鐘

響灘遠帆

浪風も遠く響の灘にさへ浮世の外を渡る舟人

唐津八勝 韓人 錦圃

大島歸帆

風帆掛處轉火輪迷泊東西兩崖春

誰知萬國工商客盡是寒閨要裏人

望夫石

天然自立野洋津碧恨紅然未了因

誰譯當年真面目鏡山落日振巾人

假屋秋月

一年明月漾金波於水於山影蓋磨

寔是清秋三五夜天山明月一年多

虹松

城東佳氣鬱葱々化作長空十里虹

霽後漸成真面目半邊添得夕陽紅

名古屋城

名古屋城空闊幾秋豊公往事夕陽樓

英魂若識交鄰誼恨入東溟咽不流

虹橋

十里松橋映翠微晴空四百彩虹飛

魚龍脊送行人轍每向江頭盡醉歸

舞鶴城

層台壘石俯江流天作東溟第一洲

鶴去城空人不見鏡山落日暮雪愁

公園桃李

燕上彤霞作一縣滿城桃李趁芳年

名疆不係看花足正是詩人得意天

東部

領巾磨山

比禮振山は鏡村大字鏡にあり又た鏡山松浦山七面山とも云ふ比禮振山とは昔宣化天皇御宇大伴狹手彦遣唐使の命を蒙り此郡に滞留の間篠原長者の女佐用なるものを召して給仕せしむ發船に臨み紀念として鏡一面及太刀一振軸物一卷を取りて媛に與ふ媛惜別の情禁せず馳て松浦山に登り負る處の領巾を振り遙かに夫船を麾く船返らず狂亂走て田島領巾伏山(一名天童嶽)に到り昏倒して石に化せりと云之れより比禮振の名起れり媛馳せて厨川(今松浦川上流)を渡るの時負る處の鏡の緒絶へて川に沈む後人の作に

沈めけん鏡の影や之れならむ松浦の川の秋の夜の月

又劔及軸は鏡山の麓辨天嶽に隠して田島に赴きたるに後にて見出し

石室に納れて其所に埋め小祠を建て、辨財大と崇め祭れりと云
遠つ人松浦佐用媛夫戀に領巾振りしより生へる山の名

萬葉集

山の名と云ひ次げとかも佐用媛か此の山のへに比禮をふりけむ

同上

佐用姫の袖かと思れば松浦山裾野に靡く尾花なりけり

細川幽齋

蟬の羽の衣に風を松浦海比禮振山の夕涼しも

定家

鰯ふりし昔の人の面影も寫る鏡の山の端の月

又鏡山とは神功皇后三韓御征伐の折此山頂に於て寶鏡を捧て天地神
明を祭り皇軍の慶福を祈られたるより起れり依りて此山麓の村落を

も鏡村と云ふ又藤原朝臣廣嗣公君側の惡を清めんとして反りて反賊
の名を蒙り松浦の里に戦死せられしより餘憤歇まず怨靈赤鏡となり
て松浦山の頂に顯はれ給ふ因て山を鏡山と云ひ村を鏡村と云とも云
へり山上祠を立て遺跡を祭り鏡山稻荷神社と云天神地祇伊勢兩宮及
息長足姫の命を祀る四方の詣者日として絶へず宮守ありて社頭を護
り遠地信者の請に依て寢食の辨をも與ふ宮の邊りに池あり周圍凡二
百五十間巾同二十五間内外とす曲玉形をなし水深三間より一間の間
にあり噴火口の跡なりと云ふ此水大旱に遇へども枯れず常に祠前の
種に落つ水草ヂュンサイあり銀垢最も富めり夏の夕杯酒の間一の珍
味たるを免れず又山顛に老松ありホセ女の松と云昔佐用媛が侍女ホ
イなるもの媛を追跡して此山に登り媛已に死せりと聞き傍らの池に
入水し相果たり後人其情を憫み紀念として松を植ゑホイ女の松と名
けしを今訛りてホセとはなれりと云

玉葛内侍土窟

は鏡山の西麓溜池の邊りにあり今は茅草生ひ茂りて見出し難き程なり周圍は丸石にて疊み上げ天井は平らなる磐石にて蔽ひ廣き三疊敷許なり抑此窟は昔村上天皇の御宇應和二年玉葛の内侍都を憚り給ふ仔細ありて幼より此松浦の里に知る由ありて隠れ人となり年十七才の時世も少し静まりたれば都に上り光る君の北の方とはなられたり其折若し荒男共に奪ひ去られんにはとて此土窟を造り參らせたるものなりと云同内侍の詠とて
雲の上心一つを留め置て草の枕を幾夜むすびし

鏡神社

第一殿、息長足之姫尊
祭神

第二殿、藤原廣嗣朝臣

勸請
第一殿、神功皇后元年
第二殿、天平十七年

當社は唐津町を距る東方一里鏡村大字鏡にあり其縁起を原ぬるに第一殿は神后征韓の役松浦山の頂に登り躬から寶鏡を捧げて天地神明を祭り異域の降伏を祈らせられしに其後山頂毎夜光を發じ人多く之れを恠む凱旋の後皇后の爲めに祠を山麓に立て松浦明神と祀れりと云

第二殿は式家の始祖贈太政大臣鎌子連鎌足の孫式部卿宇合の第一子藤原廣嗣公の靈を祀りし社なり昔者聖武の朝妖僧玄昉なるものあり屢説法と稱して藤原皇后に近侍し籠榮日に旺に醜聲外に聞ゆ公上表極諫すれども容れられず(表文大日本史にあり)却りて昉が讒に因りて筑紫に貶せらる公憤慨洩らすに道なく遂に兵を提て君側を掃清せんとす事朝に聞し大野東人を以て討たしむ公赤誠を天地に捧げ板

板川を夾で戦ひ衆寡敵せず走りて本郡値賀の浦に到り海を渡り西に
 赴んとす奈何せん風浪の阻む處となり遂に漂流して茅原ガ浦即ち今
 の大村の濱に着き給へり土人等一見其常人ならざるを知り厚く介抱
 を加へたれども遂に薨去せられたり實に天平十二年十月十五日なり
 肉体亡びて怨魂留まり爾後松浦山の頂に赤鏡顯はれ帝都も亦種々の
 恠異あり於是朝廷公の忠烈を追想し天平十七年を以て宮殿を建て神
 地を屬し鏡尊廟の號を贈り大に神慮を慰めらる其結構の宏壯なる宮
 殿は金銀を鏤め七堂伽藍廻廊釋迦堂毘沙門堂不動堂鐘樓門山門二王
 門一二三の鳥居御供殿等薨を並べ神領田二萬五千石大宮司領一萬石
 社僧領一萬石を附し現境内を入丁四方とし其四隅に塚を築き以て標
 とす（此塚四方塚とて今に存せり）又社の西南なる畑中に俗にイロ
 ハ森と稱して多くの森塚あり之れ皆伽藍又は社家社僧の宅址なり又
 社の東北に方り馬屋敷とて民家あり全國諸侯の献馬を繋ぎし處と云

宏壯想ふべし現時宮の原と稱して芝生廣潤にして四丁許を存し神林
 亦七町餘の平林平野にして一見舊時を追想せしむ當時大村無怨寺も
 同時の構造に係り草野鎮永鏡大村両社の大宮司たり鬼ヶ城に居す後
 ち二十八代宗璣に至り征韓從軍の命に従はざりしを以て神領私領共
 に豊公の沒收する所となる然れども當社は上下松浦の總社なりしを
 以て寺澤志摩守以來領主代々尊崇殊に深かりし惜らくは明和七年火
 災に罹り舊記寶物等悉く焼失せり今僅かに残りしもの如左

一天國太刀

朝臣御召品

一 鏡

同上

一 紺紙金泥法華經一軸

菅公筆

一 一の鳥居額一面

小野道風筆

一 楊柳觀世音畫像一軸（中二間）

兆殿司筆

一 勅額一面（勅額の寫左の如し）

宗源宣旨

鏡尊廟宮

肥前國松浦郡

宜授大明神號者

右依

今上皇帝聖勅神宣

御表神靈如件

天文十二年六月二十七日

奉

神部任没宿稱

神祇官領長上卜部朝臣

玄昉が首廣福寺の東院に落ち空中笑聲起れりとのともありて奈良にも鏡神社あり同じく藤公の靈を祭れり當神靈は御靈五社の一なり
あひみむとおもふころはまつらなる

かゝみのかみやかけてしるらむ

紫

式

部(千載集)

さみにもしころたかはまつらなる

かゝみのかみやかけてちかはむ 源氏物語

たらしひめをほみてつからをかしつる

かゝみそみやのなとはなりぬる

俊

雄

抑當社のことは松浦社本縁起を始め續日本紀文日本史其他諸氏百家の書に詳なれば今は其大要を摘み出せしのみ社林中に寺澤志摩守の墓あり侯在世中鏡みの宮に齊かれんとの宿願なりしも神籠の許されざる處となり止むを得ず碑を林中に建て遺言の幾分を充たせしと云此碑花崗石にして世間多く見ざるの巨碑なり幹の高さ笠及臺を込め四間半臺石四間四方許なり銘に曰

寛永十酉孟夏十一日

前志洲太守休甫宗可居士

洞源山惠日寺 (一は曹源山)

當寺は比禮振山の西麓鏡神社の傍らにあり昔大伴狹手彦歸朝の後佐用媛の死を痛み追善のため黄金佛を鑄造し之れを赤水觀世音と安置し同尊像の爲めに開かれたる一寺なり本寺は小田原東源寺にして曹洞派なりと云

此等の假山は朝鮮人某の築く處なりと云假山の後に一條の瀑布あり直下三丈下流は落て園中の池水となり木間の白布戦ひて岩間の花と相映じ涼風深く樹間を漏し四時の脉甚と勝りて本郡有數の梵刹なり

赤水觀世音

當堂は鏡村と濱崎村との間即ち鏡山の北麓字赤水の路傍にあり縁起

は惠日の條に述たるか如し堂下岩間の清水は郡内唯一の甘泉なり抑阿伽とは梵語にもある垢を焚て阿伽を盛るなど見受けたり又舟中の水を阿伽と云ふ何れ水に因みたる語なるべし此水旱して減せず雨て増さず涓々として湧き出て夏時行人をして快呼せしむ

虹松原

虹松原は満島と濱崎との間にあり行程殆んど二里故に或は二里の松原とも云ふ北支海に面し南端振山を負ひ老松幾萬株白砂の間に茂り蒼波渺漫として輕舟來往し左賞右詠殆んど行程を忘る此濱水清く砂白く海水浴場を以て四邊に鳴る故に夏時避暑の客溢れて客を唐津に移すの止むを得ざるに至ん日朗かに風暖かなるの日裸体輕笠潮水に浮沈しつゝ網曳く魚の潑々として汀に躍るも亦一入の見物なりけり林の中央海濱院なる浴場あり松を圍み松に圍まれ結構壯大工費凡二

萬餘圓を要せしと云其大略

一平家及二階坪數 各百坪

一客室 合三十室

此外浴室 診察室 藥室 院長室 賄部屋等の設けあり

一宿泊料 (湯錢共)

上等壹圓半 中等壹圓 並七拾五錢

一拜借地總坪數 六千坪

浴室數箇あり甲乙二種に分つ乙は衆客の混浴場とし甲は一人一箇を限り毎浴更らに之れを改む又一人にして終日の買上をもなすを得べし此代凡五拾錢内外なりと云湯は皆蒸氣機鑪を以て海水を呼び湯室を設けて之れを暖め鐵管の媒に依て浴室に注ぐの裝置なり院前一條の馬鐵を横へ車輪は毎時數回の運轉をなして唐津濱崎の連絡を通す又滿島より凡五丁許にして忠勇軍人戦死者の紀念碑あり銘に曰

嗚呼忠魂歸于斯徠于斯永護 皇基

明治廿三年十一月

陸軍中將從二位勳一等子爵谷干城書

此碑花崗石にして高二間半巾二間外圍四間四方許なり其傍らに

征清軍紀念碑

あり書は從二位伯爵佐野常民氏の筆に係る此林中往時より松原^{まき}敷て地方の名産あり茶店所々に開けて之れを嚮ぐ逍遙漫歩の間一茶を喫せんも亦宜し佳客よ一度瓢を此地に腰にせられんか想ふに四邊の風光は君等が第二の天性を破り圖らずも君等か口頭より歸去來の一句は湧き出さるへし實に天工の微妙は人意の企計する限りにもあらずかし

諏訪神社

祭神健御各方命

當社は濱崎村にあり縁起に云延暦三年甲子十月廿七日勸請其後大永七年迄七百四十餘年の間諸記録紛失大永八年戊子六月二日地頭高階朝臣永勝造營爾後棟札連續す祭日十月廿七日北の海濱に神幸あり攝社一字祭神素戔鳴命
末社鷹社、誓來社外二社

抑當社は神功皇后征韓の折天照大神の神托により諏方住吉二神の保佐を受け給ふ二神鎮座の地當社及平原住吉社之れなり

又云筑前博多、今津、加布里、及本國唐津、平戸等一帶の地往古異域外船の湊泊する處なり韓人誓來なるものあり鷹を當社に献す一日二本松に狩せり鷹小鳥を撃て麻小豆胡麻の圃中に下り鷹の爲めに害せらる爾後濱崎浦砂子村の地山野林藪絶て鷹なし今世不謹の徒誤て三種を落し間彼の害に遇者あるは世人の知る處なり故に土人三種を

裁るとなし乃ち其鷹を摸刻して神寶となし鷹羽を寫して神紋となす誓來此地に客死す其靈を祀りて末社となす是故に遠近より來りて祠前の清砂を請て避虺の符となし之れを持するもの敢て近かず故に遇民等獨り避虺の神となす是豈神德の萬一を測に足らんや然して亦靈威の顯赫を窺ふべきなり

又云正徳六年八月唐津侯土井利實君一度本社に社參せられしより崇敬他祠と異れり後文政元年對馬侯の邑となる侯の敬神他邦に擢て廻ち當宮を以て郡の宗祠となす對馬の國たる海上遼遠是を以て毎年田代總督をして代拜せしめ奉崇前時に超也（田代は對馬領なりき）

祠傍神園あり周回殆んど二丁假山を築き假泉を回らし松あり櫻あり奇岩其間に蟠り楓樹あり竹林あり怪石之れを擁す巨人の迫る如きは奇岩の屹立せるなり猛獸の伏すに似たるは怪石の横るなり芝生青して緑の帛を布き藤花水を隔て、遙かに色を競ひ知木は高く聳へて影

泉底に落ち日は樹頭に懸りて光滿庭を照さんどす萬綠去て千紅來り玉露曉風に碎るの朝驟雨俗塵を洗の夕佳石の豊富なる砂土の瀟洒なる規模聊か小なりと雖も多く他郷に見ざるの神園なり

玉島神社

祭神 神功皇后

當社は玉島村字玉島にあり人皇十五代神功皇后三韓御征伐の折此玉島の小川の石に立ち糸を垂れて戦勝を占ひ給ひしに忽にして小さき魚釣りたり皇后御威斜ならず珍らしきものと仰せられしより川を梅豆羅の川と名け地を希見めづらの里と云今訛して松浦とはなれり釣上げ給ひし魚は則ち鮎なり故に此川の鮎は今に金唇なりと云如此目出度き靈地なるに依り後に祠を立て聖母大明神と崇め奉れり是れ則ち玉島神社なり玉島とは干珠滿珠の珠を此地に祭り給ひしに依れりと云社

殿の左に釣竿竹とて今に茂れり立給ひし石は後洪水の爲め川底に埋れて今は見へず此御社玉島の小川の邊小丘の上にありて横三十間許の石垣は花崗石を以て見上る程迄高く築上げ中央に道を開き石階を設けて上段石垣の左右に參籠殿二棟を設け正面の彼方は本殿拜殿なり參拜の後足を回せば鬼ヶ城址は前面に屹立し大村神社また老杉の間まに認む見下せば愛良の川砂礫を滑りて清く流れ田圃北方に開け連山東南を旋り山水相迎へて地方の勝地たり委くは古書に出て諸人の知る處なれば爰に略す

神后垂綸石碑

昔神后將有事于韓西巡至于玉島立水中石投釣以祝獲細鱗魚遂大致戎于外荒如志後人建祠其河上以祭距今千有六百年水道滄易石沒不見今茲丁丑土人石井助右衛門與同志者謀樹碑其祠側表之來謁余文恭惟后之靈聖威武異域亦籍之况松浦靈蹟耿于國史結于民心陵谷雖

變有赫然不變者永存其碑存不存者也石有時泐
神明攸隲天地悠久借曰爲埋石表我小人竊畏焉又何敢文抑遠方之人
彷徨惑于無迹若譁張爲幼則此舉亦無爵謹紀其由作銘姑以告于往來
吊古者爾

銘曰

鬱々紫石神靈不測厥蟄不遠在茲廟域後世千載隱見胡讎生當厥無
鑒我石刻

文化十四年冬十月筑前龜井昱敬撰并書

玉島神社碑

松浦之地老松萬株瀕海此曰虹林白砂清泉潺々鳴環此曰玉島川其地
自古而著 神功皇后從仲哀天皇征熊襲有神憑后曰天皇何憂小醜西
方有國曰新羅若能祭我則其國自服矣天皇不信尋崩后再請神教討平
熊襲又誅熊鷲土蜘蛛諸賊遂至此川親勾針作釣抽裳糸爲縉上石投竿

祝曰吾若可得新羅河魚吞之果獲細鱗魚焉於是后躬執斧鉞督三軍往
征新羅新羅王襲服高麗百麗百濟望風而降朝貢相繼后天資聰睿攝位
七十載天下人安威風大振矣後大伴狹手彥建社于川上祀后傍奇竹叢
生稱釣竿竹至今靈威炳然祭祀彌虔明治二十一年鄉人有歎其祠宇狹
小敝祀者謀恢宏之拮据匪勉醜資即拓土造殿飾以丹雘環以石垣八經
星霜始竣工輪魚之美倍徙於舊矣因徵文於行行嘗卜居松浦盤旋乎虹
林得數趨拜祠下景仰已久夫外邦入貢始於神后○后之遠略決於玉島
此祠之所以可最尊重也乃肅然記銘曰

於鑠六師如虎如驅 朦朧破浪 張我威弧

韓王震懼脚壁獻圖 厥初出師 駐駕茲地

水兮洋洋 山兮巍巍 釣有嘉魚 天賜靈瑞

盛哉鴻烈 光破四瀛 渥矣惠澤 浹洽蒼生

崇祠千載 星輝月明

明治廿八年十月
龜谷行虔撰
平戸判敬書
たらしひめわかゆつらししくしみたま
いはひまつりしみやいたふとし俊

雄

玉島川

玉島川は唐津町を距る東方一里半水源は天山及其他の諸山より發し奔流して玉島村に落ち玄海に入る此川昔神后の鮎を釣られしより一名を梅豆羅川と云ひ其の名史上に高し水清して砂白く瀟洒たる流は征韓の當時を忍ばしめたり雲晴れ風暖かなるの日一度杖を上流に曳んか青山高く秀で、松杉深く繁り奔流低く音て野鳥空を掠め衢巷の紅塵一朝にして洗を得へし八九月の候に至れば梁を架して魚を漁す獲る處鮎鰻蟹等なり漁獲多からずと雖も亦雅客の苞を充すに足る此

鮎概して大ならざるも其價に至りては決して廉なりとせず然れども其味の美なる此魚一度市場に出んか千百の群魚赦然として三步を讓るべし況んや天下の名産たるに於てをや（一尾の價大廿錢中十錢小五錢内外なり）又下流に白魚の梁あり二三月の候一瓢を携へば水邊には柱なき艸屋の内床なき土間の上不細工なる新造疊を敷き梁番宿直所兼客席の設あり健氣にも土鍋雞卵及木炭等の備ありて特に紅葉を焼て酒を暖むるにも及ばざるなり徐かに杯を坐側の清流に濯ぎ仰で長江の極りなきを壽んも亦一日の佳興なるべし雅客よ彼の護謨体然たる疊の上宜しく酒杯の轉覆に注意せらるべし

大村神社

祭神藤原廣嗣朝臣

當社縁起は已に鏡神社の條に述たるが如し境内は正面五丁横十丁に

して後の山を伐開き大乘妙典の法華經を敷き唐金の七十五佛を納め奉り無怨寺大明神と崇敬せられたり當社老杉高く秀で祠殿も亦宏壯にして一見其舊社たるを追想せしむ碑あり曰

松浦謁大村神社

省軒龜谷行

黒雲壓宮闈。妖緇汚翟衣。肉食不知天下事
唯務摸稜舞高麗。太宰少貳臣廣嗣。不堪絨
默觀專恣。睽願宗社存天心。掃清君側是臣
志。激昂誓衆千軍奮聲鼓一朝動天地。唱義
賓王功不成。討奸敬業事翻蹟。嗚呼生前除
奸功未成。死爲厲鬼亦精誠。高冠長紳彼何
物。千秋愧死黃備生

蘇味道持摸稜楊再思爲高麗舞

鬼ヶ城

當城は玉島村大字五反田にあり昔鏡大明神及御寺明神兩社の大宮司にして草野庄三萬石を領せし草野中務太夫鎮永の居城なり此城神后凱旋の折韓國へ對する鎮營として築かれたるを後に草野の領する處となれりと云鎮永波多氏と好からず當時私戰頻々の折柄波多は龍造寺の聲となり隆信の加勢を受け草野を亡さんと企て脊後の七山道より逆寄せんとの注進なり鎮永驚き急ぎ平原の奥に出陣して戦ひけるが軍敗れて怡土郡深江村二重岳城主原田氏に依れり爰に一族の計らひを以て城郭を取戻し歸城するとなれり後秀吉公薩州嶋津征伐の折從軍を命せられしに承引せざりしを以て怒りに觸れて領土悉く沒收せられたり鎮永の墓は同村南山功岳寺にあり後大川普請の折石垣其外取崩し今は僅かに舊時の一斑を止むるのみ然れども舊記に依り左の一二を記す

一本丸東西三十間南北十一間計西南の方三尺許り土手残りたるは

塀の跡と見ゆ東は本城と二の丸との間に續き跡あり少し低くして三十間計なり其東北に二の丸あり此地は少し高し廣さ東面廿五間南北十間計なり平地なり二の丸今は茅草生茂りて築石瓦等所々に見ゆ又所々に辛堀かき残れり峻阻にして前後を見下し誠に要害の地なり居城は大村野に引地の城とて當城より低し無怨寺社より二三町村上なる所なり引地の山麓に草野常の居城あり村民は御館と云ふ南北六十間東西廿五間余の平地なり今畑となり居れり此邊處々より焼物太刀類を堀出すとあり無怨寺社の前即ち村の入口大手門ありし處なり今大門だいもんと云二の門跡を字カマエ口と云引地より遙か低き處に松尾某の築し服城の跡あり東西五十間南北三十五間計の平地なり鎮永は厚田了榮が三男にして草野長門守永久の養子として草野家を續かしめられたるものなり鎮永は有名なる勇者なりしと云

寶聚山功岳寺

曹洞派

當寺は玉島村字南山にあり昔時鬼ヶ城主草野鎮永の墳墓今玉島神社阜丘の内にありたるを此地に移し爲めに一寺を建立し法名を取りて寺號とす其墓今同寺境内にあり法名
勝運院殿前長洲大守功岳淨勳大居士

猪 堀 瀧

は玉島村字平原にあり上段高さ三丈余下段一丈を超ゆ碎玉濤々避暑の好適地なり

白木水晶山

は七山村字白木にあり濱崎より凡二里未滿なり此村西端に水晶脈を

現はしたる山あり往時より一二の士實查を試みたれども結果良好を得ざりしか或は村民之れを靈山として開堀を許さるるか空しく今日に至れり然れども此山未だ世に多く知れざるものゝ如し

加茂神社

祭神

三代實錄に日貞觀十八年六月八日癸丑授肥前國正六位上鳴神山從五位下とありて七山村中の首社なり社は七山郵便局より左折し數歩にして一の鳥居に達す鳥居より祠前迄驗敷社道凡二町計を登れば祠傍老樹森々として夏尙寒く後に溪流の潺湲たるあり鳥は白雲を辭して樹上に息ひ風は暑熱を拂て心神を清め眺望清雅又た都市に得べからざるの御社頭なり

白山神社

當社は七山村字二部の山中にあり山麓より數丁にして達するを得へし其間松杉枝を交へ鬱蒼たる神林晝尙暗きを覺ゆ本社は一大石窟にして回り凡二丈竪二間許の圓柱は両側の障壁をなし上に六疊敷許の盤石蓋て天井となり神坐其中に在り恰かも壹洲鬼の岩屋の如し此山一名岩屋山とも云

子安神社

當社は七山村字桑原にあり瀧川を距る東方殆んど二里社頭は民家と接する山林中にあり當地方は郡内の高地に屬する深山中なるを以て四邊の風光俗塵を拂ひ近く笛岳の晴嵐を迎へ拜殿本殿等備はる七山中三社の一なり子安の社號より世人安産の神となし詣者頗る多く納むる處の腹帯今や積て屋に充てり

瀧 観 音

は七山村字瀧川を距る殆んど一里の路傍にあり堂は瀧の頭上にあり堂前激流數間に水は懸崖數丈の淵に臨み狂亂躍て飛沫花き轟々の響堂々の音低く脚下に鳴りて心を寒からしむ此佛婦人の加護厚しとなし春秋二季の彼岸に詣るもの群をなし瀧の音と人の聲とは何れか勝るを知らすと云俗に婦人の嗜好物を評して芋歌舞妓観音と戯る宜なるかな

満 島 遊 郭

は満島西部の北面にあり明治十二年の新設に係る故に一名を新築と云ふ樓屋七あり日松月日加福日三吉日花月日東筑日一樂日春日之れなり妓は多く京坂に需め閨房各別にして一婦一夫の制たり庖廡も亦

南 部

鬼 子 嶽 城 址

他郷の精を抜き各樓競争甚だ勉む揚代は酒者を籠して金二圓なり殊に當地は魚貝に富めるを以て鮮肉皿に充るも囊底更に躍らず只乃公の劔舞に伴ふて玉兎の波上に跳るのみ實に一夕の豪遊も僅かに數金以て車代を剩すに足る又敢て瘠馬に鞭の煩を要せざるなり雖然油斷は大敵彼れの下紐は須らく解かしむべく我れの下帯は放つべからず

當城は松浦党の祖松浦源太夫判官久の子波多源次郎持より三河守親迄都合十七代累代の居城にして封土八萬三千石を領す本郡北波多村字岸嶽の城址之れなり然るに豊公征韓に當り名古屋下向の際九洲諸大名博多の津へ出迎の折參河守遲參の不首尾を始めとし其室頗る美

色あり名古屋陣中にて豊公之れを召さる夫出陣中の故を以て辭退して出でず公曰女の分として留主陣を守るなどの口上を構へ君命に應せざる段甚だ不心得の次第なり是非にも召出すべしとの嚴命に今は辭退の言葉もなく罷り出上意伺ひたるに豊公申され候様は汝が夫三河隠謀の風聞あり其事を攷め問んが爲めに召し出したるなり分明に申し開きたる上にて陣所へ差戻し遣すべしと思ひ寄らざる難題に答ふべき言葉もなく御前を退き既に覺悟を究めたれど又思ふ様此儘自害せば夫君の身の上尙々疑の増すとやあらんと心を鎮めて懷劍を取納め御側役を以て又々歸館を願ひけるに次の間に召出され御尋の様子も見へけるに以前の懷劍假りに懷に入れ居りたれば不計御次の敷居に取落したるを見咎め給ひ太閤が前とも憚らず懷劍すると不審なり尋問のとは重ねて沙汰に及ぶべし先居城に立歸り三河着岸迄慎み居るべしとて憤り一方ならず斯て三河守は抜群の功を建て御賞美にも與

るべき心地にて歸陣せしに情なくも隠謀ありとのを以て上陸をも許されず海上より直ちに常洲築波山の麓に配流せられ鬼子嶽城は沒収の上更に寺澤志摩守に與へられたり波多の家臣等憤懣の餘り竊かに不隠の企ありしが不幸半途にして三河守病歿せられたれば無念を吞で皆々思ひ々に散乱せり之れより先き妻室は佐賀龍造寺隆信の女なりし故領土沒收後一男彦三郎を携へ佐賀へ歸り居られしに是亦不幸にして其子病に罹り相果たれば重々の不幸に室は倍々秀吉の非道を怨み悲憤の餘り一書を遺して自殺を遂られたり時に年三十二歳一族の歎きは勿論聞人として袖を濕ほさぬはなかりしと云謚して常室妙安大姉と云ふ則ち佐賀城下に葬り一字を建て妙安寺と號し其地を妙安小路と今に云傳へり三河守配所より妻室に送られたる書面一筆ぞめしる我身事如此成行候は前世業因とや云はん御身事は兎も角も老中の面々別て岡本家は因縁も深く候まゝ談判可有之候

賊に頼るゝは彦三郎事宜敷守立て候様頼入候偏に頼るゝふじの義に候へば夕暮近く候まゝ荒増染しまゝ

三月九日

秀の前へ

好清方

未の露本の平や世の中に後れ先つ例なるらん

一筆申殘候口上の覺

一此度不運にて畢竟志摩が仕業なり然れども彼等に仇を報せず柔

和に城渡し可被致候事

一拙者子孫武士の望無之候武具は先城其祖泰大和守久覺公御同用

早く城に埋め可被申候

一用金は諸侍諸足輕迄配分可被致候

一代々の系圖は彦三郎へ渡し可被吳候養育以後は武士の望相成不申候様氣を附け可被吳候

好清(書判)

岡本山城守殿

(外八名宛)

別て廿四頭の面々へ宜敷可被申吳候

當城郭摘要

一吉志峯又は岸嶽城とも云

一唐津町より三里巳午の方にあり

一城の高さ拾三町餘坂路の難道なり

一曲輪三ツ構の廻り十丁餘

一城門口三ヶ所

一大手より本城迄廿三丁四間三尺

一搦手水門より本城迄三十二丁五間三尺

一大谷城より本城迄廿五丁九間

一本丸東四五十間
南北九十三間

一二の丸東四百五十間
南北六十三間

此間に一の堀切あり長さ五十二間
深さ十五間

一三の丸東四百八十五間
南北六十五間

此間に二の堀切あり長さ七十三間
深さ二十四間五尺

一腰曲輪茶園の平なまと云處あり侍屋敷跡分明なり南北八丁の處なり

一本城より東北に當り少し踏み下り水の手出水あり

一城山より南に當て米の山あり麓の川をすみ川と云ふ里に下りて

東川と云

一本城に御手水場二つあり所々石垣礎なり一の堀切より二の堀切

迄長さ三十三間と云二の丸長さ四丁

一本丸長さ三丁横一丁半東の方に三右衛門殿丸と云あり

一大手佐里の方搦手は岸山の方なり

一波多殿旗本諸士在番屋敷佐里村にあり舊跡申傳多し

一大手口馬乗馬場あり

一佐々木殿屋敷と云處ひま蒔田村にあり

一波多侯の旗下諸士在番屋敷竹有村山彦村の内にも數多あり

一安藝殿坂と云處蒔田にあり則屋敷なり

一馬渡五郎の館徳末村にあり馬渡池とて少しの池あり

一女郎町の跡岸山村にあり

垂たな

玉たま

は北波多村岸岳山中にあり舊と城内に屬し岩石高く蔽ひて清泉其頂より落ち点滴崖を穿の語實に現地にあり老松古杉其周邊に茂り晝尙暗きを覺ゆ岩下に當城の鎮守神たりし鉾嶽神社あり傍の岩壁數多の

佛像を刻み風景最も幽雅なりしが今や炭坑日々に開け幽致其半を損す

鎌倉岳

は北波多村竹有にあり西明寺時頼此山に息ひ諸方を見物されし故鎌倉岳と名と云へり

日生山心月寺

本尊千手觀世音

開基波多三河守親

開山承陽大師六世孫真空禪師の法弟仁岳

大和尚

當寺は鬼塚村字山本にあり鬼子岳城主波多三河守の前室心月瑞圓大

師を葬り一寺を建立せしなり墓處は本堂本尊の下にありと云法名を

取りて寺號となす厩所には日生院殿心月瑞圓大師とあり

什物

一夢中飛入觀世音 御長一寸八歩

此佛心月前祈念佛と云

一琵琶 心月前用品

此外天竺傳來苦行釋迦并に心月前の懷劍珠數等ありたれども今はなしと云

芙蓉山醫王寺

曹洞宗本山能登國總持寺

當寺は久里村字黒岩の中央大道より凡四五丁の山奥にあり四邊皆古木に圍まれ自然に世俗を外脱するの心地せらる實に吐鵬中宵に鳴て

山水容を收むるの時須く凡惱の夢は破らるべし又躑躅を以て名あり
老幹苔を垂らし紅白色を競の姿四面の綠葉と相映じ山中一の優觀た
り寺内に北條氏房の墓あり又大友の墓とて大なる塔あり殊に名古屋
在陣の諸侯書寫の大般若經あり其姓名をも記せり此寺伊岐佐村三光
神社の相殿なりし愛染明王は神佛混交禁止の令に依り同社より當寺
に遷されたるも諸利益多しとて善男善女の參拜するもの月に群をな
す之れ郡内屈指の古刹なり

陣 の 山

は久里村字伊岐佐にあり建武二年足利尊氏九洲に没落せしとき岸岳
城主松浦源三郎繁と戦ひたる地なり其れより陣の山と名け其麓を軍
場とて今に地名傳はれり

見 歸

瀧

口給參照

は山本停車場を距る東方一里大字伊岐佐にあり村の西端より約一里
にして達す一名イロハ瀧と云ひ女男二流あり郡内第一の瀑布にして
懸崖十七丈遠く之れを望めば恰かも白練の樹間に懸るが如く飛沫散
して霧となり水聲響て雷の如く雄壯の天工紙上の及處にあらず

音にのみ聞てやまめや伊伎佐山名も面白き見歸りの瀧

俊 雄

熊 野 神 社

當社は慶長年間波多三河守源盛侯の勸請せられたる舊社なりと云相
知村中央にあり九鐵支線は一の鳥居を掠めて通行せり祠殿は一高丘
の上にあり四圍皆古木を以て充され東北一條の大路を開き石階數百
段を重ね清雅幽翠を極む毎年秋季には松浦川の上流山崎の川原に神
輿の渡御あり驛より曳山を出し近郷稀なる盛典なり相知炭坑及鶴殿

岩屋等層宇の間にあり之れ當地方有数の社なり

妙音寺 端松山

本尊聖觀音

曹洞派本寺武雄圓應寺

開山湛然大和尚

建立觀應二年

開基松浦党筑地孫四郎入道禪正

當寺は相知村大字相知にあり當初は相應の大寺なりしも幾多の年月を經伽藍等總て廢毀に屬せり時に享祿二年武雄圓應寺二世勝山大和尚此地に來り波多壹岐守源盛を大旦那として再興し數々經營の結果當時は宏麗美觀を呈し郡内屈指の巨刹となれり

鵜殿岩屋

は相知驛の西南相知炭坑の傍らにあり人皇五十一代平城天皇の大同元年秋八月空海上人此地に來り此所を佛縁ある地と見認め洞岬の中央に彌陀釋迦觀音の三像を始め其他諸神諸菩薩を刻まれたり其後仁明天皇承和二年常曉法師の弟子某空海上人眞作の藥師如來日月光二菩薩の尊像を安置せしに後兵亂の爲め一切の建物等焼け失せたり其より年を経て元龜年中松浦党因幡守久家の歸依により岩岬中に堂宇を建て藥師如來日月光二菩薩尊を安置せられたりと云ふ此邊の山々皆岩組にて上に老松の腰を屈めて生茂り岩には苔又は葛など取巻き何となく古さびて雫など滴れる氣色は夏の熱さも打忘るゝ計にて古跡のみならず又一入の勝地なり

佐用媛屋敷

は本郡と小城郡との境篠原村ささはらにあり篠原長者の屋敷跡あり此邊に名

殘の坂と云處あり狹手彦入唐の節長者の一門見送の杯をなせし處又
名殘の酒とも云ふ健かなる舊跡なりと見へたり又此處に井倉の清水
とて清泉あり豊公の稱美せられし甘泉とを其名高し

阿蘇大宮司惟直墓

此墓は本郡と小城郡との境なる天山嶽の頂上にあり建武三丙子年足
利尊氏官軍新田義貞と戦ひ利あらずして九州に走れり時に官軍に於
ては肥後國菊池氏と阿蘇大宮司とを語らひ筑前國の多々良濱に於て
大に尊氏と戦ひしに不幸にして敗れ惟直は松浦郡天川山の内小杵山
にて自害を遂げられたり其時遺言して故郷阿蘇山を見る處に葬るべ
しとなり因て此處に埋葬す石塔臺共に高さ四尺一寸臺の回り一尺二
寸四方なり五輪塔あり
一天山の頂は天川山麓より廿六丁

一 小杵山は天川山の内にあり東西八十間南北百三十間の雜木山なり
麓より絶頂まで七丁荆棘山とも云臣下の墓同處の内通石山と云に
あり之れを五人塚と云惟直自殺の場處は天川山の人家より廿六丁
あり先年は山の中に石を立て脇に杉を栽へありしが後ち野火の
爲めに焼け失たりと云

一 通石山は麓より六丁にして草野なり絶頂より少し下に大石あり高
さ數丈回り五丈八尺此石に通ひ抜たる穴あり其内に通石權現と云
祠石あり五人塚は山の中程にあり五人塚より小杵山迄五丁餘あり
通石山の絶頂手廣き平地なり合戦の場處なりと申傳へり

一 池原村より平原村に山越の道に弓折と云處あり之れは大宮司惟直
多々良濱の追手近附たるとき箭を放たんとされしに弓半より折れ
たり弓を捨て相戦ひ數ヶ處に手負て漸く敵を拂ひ山越に池原村遊
草と云辻を越へ下の深谷に忍び一夜を明かし手疵に苦み其より小

杵山の麓陣の平に行掛り又々追手と戦ひ遂に自害せられし舊跡なり遊草の深谷を夜泣坂と唱へ來れり
 惟直勅命を受け朝敵を亡さんと思の誠忠天地の間に盈ち從臣迄如此
 殉死して君臣の義を明にす惟直天道に耻ざる大道は踏み不幸にして
 此最期を遂げられたることを山野の賤民に至るまで墓及戦死の場處
 など知らざるものなし又古代のと墓標などもなきとあり墓ありても
 碑名もなきと多し獨り惟直に至りては如此疑ふべき兼もなく判然と
 傳はりたるは誠忠の天に通せし處ならんと或る書に見へたり惟直の
 末裔は今本郡濱崎村及南山村に熊本家とて傳はれり

西 部
 假 屋 灣

假屋灣は郡の西方唐津町を距る三里值賀村大字假屋にあり周回四里

東西三海里南北二海里水深拾餘尋より廿餘尋に至る水底皆泥土にして
 一の暗礁なく岸邊水深して灣口僅かを四百三十間岡陵圍繞して風浪
 の憂を絶ち大艦巨舶安じて錨を投すべし今や陸運大に開け伊萬里九
 鐵支線を隔つる六哩連絡只一朝の工事のみ浦鹽に航せんか五百海里
 餘釜山に渡らんか百十海里上海赴へく南洋航すへし嘗て海軍水路部
 長肝付君評して曰く本港の價直たる舞臺の次宮津の上に位し我國港
 灣多しと云も海外的觀察よりすれば本港を捨て他に見るべきの港灣
 なしと稱揚せられたり以て港灣として如何に天工の豊富なるかを知
 るに足る又近傍炭脈多し殊に岸邊大字牟形むかたの如き目下無煙炭の開掘
 に着手せる等に於てをや他日の望蓋し寡少ならざるを覺ゆ灣頭島あ
 り三島と云ふ島中社あり三島神社と号す諸冊の二神を祭る松柏鬱然
 として影波上に浮び磯波岸に來往して社鼓水天に鳴り風色清涼雅致
 擲するに足れり灣口又小祠あり龍の駒と云昔藤原朝臣廣嗣の愛馬龍

馬を埋めし處なり又疊崎とて眺望優逸晴嵐愛すへきあり借問す世人
は此烟嵐取て足れりとなすか嘗て韓人の詩作あり

假屋灣入勝 韓 人 柳紀淵

佛島匿鷗

黃金白雪不關愁同立天然假屋洲
滅性忘機無二致鷗中之佛々中鷗

竹島清嵐

叢々玉立飽霜枝想見當年老鳳儀
強喜林風涼不絕淵明聞臥北窓時

天山落照

落日春々辨岬時人情到此感傷悲
明朝退却殘霽月又上扶桑第一枝

保山明月

高樓百尺保山隅院有疎篁埤有梧
捲上荻籠推畫燭一輪明月致天衢

席石歸帆

廣石平盤海上頭何年來此送韓舟
席痕惟有神后跡嗚咽嗚波不盡愁

比翼晚翠

禽中比翼昔聞名雙去雙來度一生
更嫌象鳥高飛盡化為赤甲老江城

傘松庇雨

熱路豪華美少年青紅陽傘半遮天
爲嫌白屋無人庇特立松東佐賀縣

鼓岩漁火

丁簾暮捲近江湄漁市紅燈九姓籬
聞有馮夷來擊鼓松來深夜月明時

書假屋八勝之後

花之異者石之危畫未能時繼以詩
於詩於畫終難盡却歎天公造化奇

五郎十郎瀧

は有浦下村にあり直下各十丈地境清涼にして夏尙寒く幽致愛すべし
只恨む假屋灣一度開港せられなば相距る僅かに里餘南洋の焦熱忽ち
洗ひ去らしむべきにと

入野眺望

入野は唐津町を距る殆んど五里實に本邦の最西端なり遙かに平戸五

島を認め名にし負ふイロハ島等膝下に散亂し夕陽西に暮て海は一面
の紅を漂はし水天万頂の間風は蕙帆を孕せて遠く漁舟を送り暮色蒼
然として漣波彼岸を越り牛は手綱を緩めて炊烟脊後に起るの處千念
立所に消て万感忽ちに起り世事紛々の巷は去りて浩天洒落の天界に
遊ぶが如く寂寞の狀閑幽の景何れの地にか將た之れを求めん嘗て源
顯國朝臣高麗の堺を見んとて此郷に入り

道遠き入野の末のつぼすみれ春のかたみにつみてかへ
らん

と又西行行脚も此地に來り

見渡せは之れより先きに山もなし月の入野のかきりな
るらむ

其他

海の高麗地はるかにみわたせは雲と浪とは一つなり

けり
刑部卿頼輔
秋風も入野の空も鐘の音もあわれは西にかさるなりけり
細川幽齋

納所住吉神社

當社は入野村大字納所にあり昔神后征韓の役守護神として祀られたる社なりと云假屋灣口を距ると僅かに半里社は村の中央に位し前に一條の細流を横へ三面皆數丁の神林を以て圍み華表二基水を夾て聳へ祠殿は石階の上なる高地に建てられ玉垣二重内外を繞り松杉鬱々として社殿を護し流水混々として千古に流る大祭は九月廿九日なり神輿一臺村内の平野に渡御せられ近村群集千を以て數へ其盛なるを西邊に冠たりと云社格は郷社にして郡内六社の一なり

雌雄及白糸瀧

雌雄瀧は入野村字駄竹にあり直下七丈余白糸瀧も亦同村字高串にあり高さ七丈五尺岩頭素練を懸るが如く何れも地方の壯觀なり

呼子港 口繪参照

當港は唐津町を距る西北の方四里郡内大道の盡る處にあり車馬の往復朝暮に頻繁たり港灣水深ふして大船を繋に足り各倉庫は岸邊に櫛比し一の棧橋を用ひすして百貨の出入自在に辨す陸路破れしが如く海運亦如此貨物の集散往時西國第一と稱する亦宜ならずや況んや灣口田島の靈島を横へ北海の風濤襲ふに由なく船頭枕を安じて北斗と語らしむべきをや獨り恨む街衢狹隘にして僅かに車馬の單行を許すを商家富豪多く概ね京阪地方に向て直接の取引をなす小學校あり村役場あり警察分署あり裁判出張所あり銀行保險の各社あり妓樓も亦所々に點在して風浪万里の旅客を慰め對岸殿の浦に燕舞開くれば北

岸片島に搦戦起り春の曉夏の夕絃歌水を渡りて爲めに舷側を揺かし千燈四邊を繞りて不夜の城たらしむ別に灣頭阜丘の上一の公園あり園中烏帽子燈臺の官舎あり眼下高島の燈臺あり南方僅かに半里を隔て、山下疎松の鬱々たるもの之れを名古屋の城址となす城址の右方一條の岩石長く海面に突出せるもの所謂波戸の岬なり岬と園との間小島點々岩上松あり水面石あり白帆黒烟交々來往一見怡然たる假泉なり園丁の帚未だ新なりと雖も別に此風光あり優に街衢の塵粉を避るに足る此港亦た地方の都會なり

湊疫神社

祭神 素戔鳴男命

當社は唐津町を距る西北の方三里湊村の西端にあり規模大なるも清く雅ひし神垣に種々の建物など残りなく建て並べ鶴か浦輪の

蛭か子が朝な夕なに曳網の網の細目も漏しなく御守深き大神と瓦ヶ崎や立神の磯打浪の音高く四方に聞へて明暮に詣るもの、甚と多く御垣の松に浦風の吹て琴なす床しさは西の邊りに稀なる御社なるべし

立神

は湊村の海岸にあり全圓皆奇石を列べ就中周圍凡數丈を以て回らすべき圓柱の高く中天に聳るあり奇岩處々に點埴して能く潮風の刺撃に耐へ岩脚の激浪は飛沫を産で恰かも自然の畫幅たらしむ實に本内屈指の勝地なり

土器崎附七ッ釜

は湊村より西北凡一里宇屋形石の岬端なり昔し神功征韓の役此所に

て勝軍を祝し神酒給はりし時用ひられたる土器を捨て給ひしに因れる名なりと云全巖皆玄武石より成り六角形の圓柱は束ねたる薪を積めるが如く數十尺の石材は恣まゝに横はりて能く落ちず梁桁縦横或は海神の用材にあらずやと疑はれ或は神仙の洞窟かと訝らる窟脚七ヶの洞穴を穿ち小舟を通すべきもの二あり俗に呼で七ッ釜と云風靜なるにあらざれば白波窟内に迫りて舟を進む可らず其天工の巧妙なる其配置の磊落なる一度此に遊の士杲然として言なかるべし舟は湊浦より雇をよしとす舟路神集島の古跡及立神の勝地あり唐津に遊の士一棹を試て可なり但舟一艘の賃金凡一圓

御軍に御酒給はりしかわらけの浮びし崎の名にこそありけれ

芝園

神集島

神集島は唐津港口の島嶼なり昔神后三韓御征伐の折艦裝を此地に調へ皇軍の勝利船中の安全を祈らせられしに住吉神を始め多くの守護神集り給ひ皇后には種々の靈夢など御覽せられ時節至りて御發船相成りたる古跡なり右諸神集り結ひしに依り神集島とは名けたりと云其時進軍の鯨波船に溢れて玄海洋に響き渡りたれば一名響灘とも云へり今に此島に弓張と云處あり夢に守護神の弓張られし處と云天下若し事變あれば此處陥落すとのとにて今崩れたる跡あり又皇后の評議岩と云巖あり諸人此石に腰を掛けず西の端少し廣き平地に社あり村社にして住吉神を祭る境内敷丁步老松班に相茂り小石一面に敷渡され外は渺茫たる玄海に面し内は小き灣を擁き幾十艘の小舟は社前に繋り一見往時の忍ばれて最も尊き御社なり此島東岸黒瀬に大敷網の神鯨組あり明治十一年の創立にして鯨其外雜魚の網代あり漁獲最も多く毎年の収益万金を以て敷へ郡内無比の好漁場なり

此島の彼岸を湊と云又一名を鰐が浦とも云皇后鰐が浦より船出し給ふとも舊記に見へたり其後三韓より貢の船此浦に着きしに依り湊の名起れりとなり抑鰐が浦とは往昔此地の蟹の子海邊に出て迷子となりければ其母濱邊に出て其行術を尋ね彷徨ふ折節誰とも知らぬ人來りて何を悲しむやと問ふ蟹答へて我は夫に後れて男子一人を産めり其子成長して七うになりぬ今日行術知れざるを歎く憐れ知り給はゞ教へ給へと云ふ彼男云様は我妻とならんや其子を尋ね出し得させんと蟹嬉しく誓をなしぬ其夜果して彼の子を連れて蟹に與ふ此男夫より日毎に出て夜毎に數々の魚を取り來り其妻に賣らしむ或る時此浦の漁夫共釣に出けるに海中に怪しきもの浮み出たり之れを見るに大なる鰐死して様々の魚を取り妻の襪に貫き喰へ居りたり其後蟹の夫來らず蓋し此鰐假りに化して夫婦となりしものならんと評し合ひて之れを埋む其處を鰐塚と云ひ其浦を鰐ヶ浦と名けたりと暫く

記して御伽話となす

潮音寺

山號を普墮落山と云ふ湊村にあり當寺觀世音は安元元乙未年小松内大臣重盛公の願望にて難波の浦より送り奉られし尊像なり抑此浦に着せられたる因縁を尋ぬるに其頃此浦潮の鳴ること數日にして金色の光すら輝けり時に萬吾萬六と云兄弟の漁夫あり網を下して試みければ忝も此尊像賤夫の網に罹り給ひぬ兄弟の者打驚き蟹が伏屋に移し奉りしに皆々奇異の思をなし早速小堂を建立し參らせたり然るに靈像夢中に出現し給ひて此穢土を淨地に復すべきにつき用心せよと告られたり果して火事起り彼の堂も焼け失せたるに不思議にも尊像は依然として損せざりしと後寛元四年蘭溪と云僧來朝し其法弟惠教法師西海に行脚の折普墮落山潮音寺と云七字を壁に書附け去られた

り此蘭溪と申すは後に大覺禪師と号して鎗倉建長寺の開山なり又重盛公此尊像の内に金子百兩を封し込み置かれ應永四年修復の爲め上洛せしめたるに佛師其金子を抜き取り爲に狂亂して遂に入獄の身となりしと云幸に尊像は湊浦に戻り着き給ひけり右百兩の金には重盛公法華經一部を書寫して納め奉られし大願成就の尊像なりと云

醫王山東光寺

當寺は佐志村字相賀にあり本尊は藥師如來にして弘法大師の作佛なり往古玉島村字淵の上に安置しありしか承安二年洪水の爲め一村崩れ落ちて尊像も海に入り給へり後三年を経相賀浦に毎夜光現はれて人々怖れ居りしに一人の旅僧來りて正しく靈佛の海中に座し坐すならんかゝる例間々ありとて海邊に出て讀經せられしに海中益々光を發し尊像現はれ給ふ浦人等跳り入りて之れを捧け小堂を造りて安置

し奉れり抑此佛は弘法大師天曆五年より祈誓のことありて入唐し歸朝の後大願成就の爲めに刻まれたる七佛の一なり余の六体は三洲蓬萊寺攝洲有馬湯山讚洲小濱因洲鳥取肥後法華嶽筑洲堅粕にあり承安前後の頃は鬼ヶ城草野氏岸岳城波多氏二重城原田氏等縁者の間柄として領土取合の争ひ屢にして自然に土地の穢を來し斯くは遷坐し給ひしなるべしと

佐志八幡宮

祭神 仲哀天皇 神功皇后 應神天皇
社格 郷社

當社は唐津町を距る僅かに廿町唐津西港に面し境内甚だ廣からざるも全園回らすに土塀の間赤の玉垣を以てし華表二基社頭に聳へ社前水を引て假泉を設け架するに石橋を以てし渡りて祠前に臻るを得

本殿拜殿神庫社務處等配列其宜しきを得老松空に聳へて潮風琴を鳴らし一見地方有数の社たるを覺ゆ

社記に云人皇七十二代堀川院の御宇康和三壬巳年源義家の家臣鎌倉權五郎景政九洲退治下向の節石清水八幡宮を此地に勸請有之十一月十九日奉安せらる後人皇百代後圓融院應安五年二月六日源義満の家臣右衛門佐源頼泰九洲退治として松浦へ下向の節夢想のことありて願書を神前に捧げ社の修理を加へ神田若干を寄附せらる其後松浦党より信仰愈厚く社の修理を始め神田等數多寄附ありたり然るに天正の未豊臣秀吉神田殘らず取上げらる後寺澤志摩守尊敬淺からず社の修理を加へ御鳥居等を建られ神供米一石五斗を寄附せらる正保四寺澤兵庫頭逝去同家沒收となり翌五年御料となり東都より上使下向萬事取調の上御修繕御供米等被相定慶安二年大久保加賀守の封内となり信仰厚く近代小笠原家迄當社及唐津鏡の三社は領主の祈願所とし

て奉崇最も厚かりし

切木牡丹

切木牡丹は地方高名の物にして切木村某の有に係り老幹の氣骨凜然として能く風雪を凌ぎ繁りて敷坪の廣きに涉り艶たる老婆人を惱まし四方の觀客千里を遠しとせざりしが今や隣村有浦村某が多年の渴望黙止難く其内一株を斷然無代を以て贈呈せしに人あり某をして金三百を贈り其厚意を謝せしめたりと山野僻陬の地一株の贈答如此以て如何に非凡の逸物たるやは知るに難からざるべし

小川島

本島は郡の西北呼子港を隔つる三里壁島に對する孤島なり島中往時より捕鯨組ありて今日に繼續す之れ本島の特有物なり其組織を左に

掲げん

捕鯨組

一 當組は今より百三十五年前に始まりたるものにして現今は株式組織として資本金四萬三千圓なり

一 納屋は島の東端嶽の山海邊に凹形の石垣を築き上げ豎廿二間横十二間の藁葺家にて入口は石を疊み一段下りて一面に簀子竹を敷き詰めたり又東側に瓦葺の家あり之れは事務所合宿所等にて上納屋と云ふ

一 納屋場は四反四畝十歩事務所は廿四坪物置廿九坪大納屋二百八十坪番小屋二ヶ所あり

一 諸道具は、ろくろ臺、大庖丁廿枚中庖丁若干、釣棒五十本、段切庖丁若干、臈籠若干、舟廿艘、鑊（但しもりとは長刀の如きものにて鯨体に突き込むものなり）五十本

一 漁夫は波坐士（はざし）と云合三十二名内六名は鷹振なり

一 漁場を網代と云ふ其場所六あり如左

一 嶽の山の下水の浦と云處の海岸より凡八丁計沖合を坐頭鯨の網代とす

此處海底砂にして深さ廿三四尋なり

二 同所海岸より廿丁計の處を長須鯨の網代とす

此處暗礁三あり潮流烈敷海底は一面の小石原なり廿五六尋より三十二三尋までなり

三 右の外永の尾雁の尾の両網代あり

四 加唐島の内淀の網代と云處あり坐頭鯨に最も能き處なり島中第一の網代とす

五 同所字小泊口（こまぐち）と云に網代あり海岸より凡五丁深さ廿八九尋より三十二三尋に至る海底一面の小石なり

六 同處字黒水沖と云處に網代あり深さ拾八九尋より三十二三尋

の處海底處々に暗礁あり此所最も長須鯨の網代とす
 一捕漁の季節は往時は小寒十日前より始め翌春土用の明け十日後に終ることとせしが今は小寒三十日又は廿五六日前より始め其より日數凡百三十五日と改めたり此小寒中を長と云ひ傳へて長須子持等の最も多き時節也

一鯨の泳き道筋は小川島山見より丑寅に當り烏帽子島と地の島との間又子丑の方於呂の島見渡しより游き來ることあり春彼岸後は上り鯨とて申酉の方北松浦郡平戸島より馬渡島南の方に掛け游き來ることあり

一游き方の順序は鯨鯨を先とし其より白長須長鬚座頭とし榴花の盛り頃には鰈鯨の好時節と申傳へしが近年は此魚至て稀なり白長鬚は又四月頃再ひ來ることあり最終には鯨鯨長鬚なり之れにて通り鯨の終とす

一漁法は

先つ一切の漁具は夥敷各船に積入れ毎朝未明より世子せこ、持双船もちふたぶね等魚見場處に備へ附く

外に流し舟と稱して卯申酉三ヶ所の海面に船を漕出し鯨の來るを待つ鯨來れば直ちに旗を擧げ魚見場所へ示す

魚見場は此旗を見れば又直ちに蕤旗を揚げ船子に傳ふ（未明中なれば炬火を用也）此時世子舟は油斷なく漕出し鯨の振合に應し緩かに網代の方に逐回し來る

鯨網代に向へば塵持の波坐士は潮流の緩急海の淺深鯨の方向及遲速等臨機應變即妙の考を決斷し網張の號令を下す

鯨魚網に近に従ひ舷を叩いて烈敷音を鳴らし鯨波の聲を擧て網中に逐ひ込むなり

鯨魚網の中に入りたりと見認めれば直ちに口張網をなして後方を

絶ち切り又一會烈敷能を叩て魚を驚かしむ魚は驚怖の餘一速く網を脱せんとし惣身の力を込めて狂奔す（此時乳合と云て幾枚も有る網を小き緒にて結び合せたれば其緒切れて網は一枚となり鯨の頭より半身に掛けて網を蒙り自由に泳き難き様に仕掛けたるものなり）網は離れて魚を包む魚は網を蒙りながら一生懸命に遁け出さんとす時に世子舟持双舟は全速力を以て之れに逐付き逆巻く荒浪を物とせず各先を争て鯨を打込むなり（各五六本以上つゝ）此時一人の波坐士は隙かさず手形庖丁を携へ海中へ躍り入り鯨の鼻を貫き之れに網を通し網を舟に結び付るなり次て鯨体へ劔を突き入るゝこと鯨は凡五百坐頭は二百長鬚は百五十振以上なり左すれば肉中に潮水浸み入り勢力次第に衰ふ此時持双舟に縛り付け納屋場へ曳き來りて解剖するなり

一 解剖順序

一脊の身を左右に割る脇の身も同じ

二大骨を抜く（但し大骨とは脊の中央より丸切して腰の骨目迄を云）

三山の皮を剥く（頭のことなり）

四頭を反す（上頤より上側を云）

五丸切を切放つ（丸切とは腰の續目を云）

六肋

七肋を反し臓を出す

八肋を割り左右に開く

九敷の皮を掲く（但股の畝簣のことなり）

十頭を割る

十一丸切より下の皮身を剥く

十二中切庖丁にて百五十斤或は二百斤位に切りたる後納屋の

魚棚に荷ひ入る

一 骨肉の分類左の如し (三十八種)

赤身 畝簀子 片皮 皮身 大小骨 臟 瓦羽毛 高股 油肉
 傳道回 舌 胴輪 棚間 筋皮 大剝 床根回 イチコ ニヘ
 上フタ 下フタ 開身 開間 小小骨 替間 一羽 猪皮 開
 淵 替剝 頭剝 ウナキ 沙吹 海老 頭間 子袋 乳腸 内
 拂 骨剝 棚浚 (之れは跡掃除物)

一 骨納屋は事務所の東隣にあり横八間に長さ十二間の藁葺屋根な
 り骨切場、唐臼塲釜塲の三つに分る先つ鯨骨を荒割して西の隅
 なる婦人三十人餘に送れば婦人は之れを細く削り六ヶの釜にて
 油を煎し出す釜は練瓦の平釜にして烟突の備あり煎し出たる骨
 は東の隅なる四ヶの唐臼に送り粉末として肥料となす爰に面白
 く又おかしきは骨削の歌にして太鼓のドン／＼の調子に合せ一
 様の庖丁を使ひながら蟹の乙女が白くもなき御面相に決して小

くなき口を遠慮もなく打廣げ歌ひ合ふ有様は又別界の見物なり
 けり

一 仕事歌

あすはよいなき沖まぢや遣らぬ磯の
 藻際で子持ち取る

親父舟かや萬崎沖よ磨こをふりやげて
 水門みどまねく

水門は三重側其のわさや二重蟬の子持は
 のがしやせぬ

納屋のろくろに綱くりかけて蟬を巻く
 のにや日間もない

一 近年の捕漁數

明治三十年度 拾 頭 二七、六二〇円一二四

同三十一年度 拾四頭 二三、七七六、三九三
 同三十二年 拾五頭 三七、九〇八、八七五
 同三十三年 拾七頭 四六、六四四、一七四
 同三十四年 拾七頭 四四、一四七、六八二

外に青色のボートに鐵砲備附の捕鯨船三艘あり長さ四五尺の手打銃にして七人立の櫓に砲手一人なり又近頃横須賀丸と云ふ惣噸數七十二噸七七公稱馬力三十五馬力の小蒸氣船を買入れ驅逐船として銃も備へ付傍ら双海船用として捕鯨法の改善を圖られたる由爾後捕鯨事業の發達期して待つべきなり

以上述る處餘り管々しかりしも其實當郡の一見物なれば雅客參觀の便にもと如此くものし又捕鯨現場の壯觀禿竿の能く及ぶ處にあらず此他島中の産物としては小川海鼠ウシの名最も高し

國幣中社田嶋神社

呼子村大字加部島鎮座

祭神 湍津姫命 田心姫命 市杵島姫命

相殿 大山祇命 稚武王命

境内末社 佐與姫神社

祭神 佐世姫命

全上御崎神社

祭神 猿田彦命 級長津彦命 級長津姫命

社傳に曰く延喜式神名帳に載する所の肥前國四座の内名神犬と有之は則ち當社の事にして古來奉仕の社家ありしも僻遠絶海の孤島にして聞見に乏しく且つ胡元の襲來するに當て其亂暴に遭ひ古記重寶を奪ひ去られ其經歷を詳にする能はずと雖とも國史の記する所口碑の傳ふる所を考ふるに千早振神代の昔諸冊二尊の産成給ふ姫島と云は

即ち此島にして本社^の祭神惟神に鎮座し給ひ社殿は島の東北松浦の
澳に差出たる松櫻鬱葱と繁茂せる丘上に在りて西北に面せり

島内所々に鬼の岩屋と稱する所ありて折々曲玉甕瓶等の古器物を掘出し右跡の微
すへき所を殘せり

又曰く神功皇后攝政の九年四月松浦縣に著御玉島川に逍遙し財の國
を求めんと欲し釣を川流に投し細鱗の魚を得て其必勝を知食され鏡
を山上に安置し進軍の安きを祈り或浦に鹿に逢ひ或里に朝を落して
里名を殘し或島に天神地祇を招奉りて島に神集^{かじは}の稱を留め征韓の纒
を罽の津に解き御島を此島に寄せ大神の加護を蒙り玉ひし事あり

其後天平三年大山祇命稚武王命を相殿に祭り同十年の夏大伴占曆を勅
使として田島大明神の神号賜へり 島中に田島岳と云ふ最高の山あり今は詛
あり麓に三四の古墳あり是或は稚武
王命の御墓にはあらざるやと云ふ天平勝寶八年寶殿に一つの岬出で國家
安全の四字を顯はし承和元年小野篁入唐の船を寄せて海上安全を祈
り船中に通夜せしに入唐今一年を延さふれば害に逢ふべしとの神託

を蒙り虚病を構へて歸京せしが逆鱗に觸れて流罪せられたり時の災
遁れ難しと雖も異邦の害を免かれしは當社の神助に因れりと云ふ
大同元年神戸十六戸を寄せられ貞觀元年從四位下の神階を授けられ
元慶八年從三位の神階を授けらる

又武將に於ては源滿仲殊に崇敬し祭田を寄附す其子賴光常國の國司
たりし時石の鳥居を建立せり 此鳥居は天元三庚申縣令波多氏修造之と云ふ銘
を刻し今猶社頭に屹立し古色蒼然たり當時の額
面は參詣佐理卿の筆蹟なり
と云ひ神庫に現存せり

其後天正八年波多下野守田地拾貳町を寄附して神殿を造營せり 此地
地な
らんか本郡打上村の内赤木と云ふ里あり毎歲夏越祭に初穂の
粗を献し來りしも如何なりしや維新の後は廢したり

文祿征韓の役豊臣太閤參詣在て戰勝を祈り社側の大石を見て吾祈る
所驗あらんには此石二つに割るべしと鎗の石突にて突たれば神山鳴
動して其石中央より破裂せり 其石は祈念石と號へて本
社の側なる山中にあり 其名護屋在陣中屢
參詣ある間に本殿神祠の扉に

しのひねのなみたはいろにいでぬれと

ものやをもふととうひとものなし

なご樂書せられたり此扉數枚今猶
神庫に残れり

又末社佐世姫神社此神は大伴狭手彦の妾にして宣化帝二年十月壬辰朔狭手彦任
那に出船するを慕ひ追て此島に來り社頭に伏して其船返し玉

魂を止めたるを祀りし所なり貞の靈驗を感し社領百石を寄附せられたり

此地徳川氏の時に至りても代々朱印を以て宛行は
れしも維新の際より廢せらる

又末社御崎神社の祭神は豊公征韓の役に使用せられたる使船に真柳

を立て鏡玉を採懸て奉齋し如何なる逆風荒浪も纒を解て漕出れば追

風となり真帆穩に七度を往復するも變ることなく神助の驗ありしと

て其恩を謝し船共に奉納あり依て神明は末社と齋き奉り船は磯頭に

繫きありしも年を経て朽解し其縊材は今猶神庫に残れり

此縊材の一片を船板の守と號て船頭共拜載し船中に奉祀すれば覆没の難なく常に
順風を得ると云ふ

此島周回三里餘土地凹にして丘陵相圍み樹木繁茂し清澄なる溪水絶

えず流出し池塘常に堪わ田圃相開け五穀豐熟し陸に耕耘の饒なるあ

り海に漁業の利ありて島民百五十餘戸生活に不足なく春は神山の櫻

を賞し夏は宮の浦の海水に浴し秋は杉の濱の月に謠ひ冬は遠山の雪

を小濱の磯より眺む天真の風景絶佳なり古來島名を姫島と唱へしを

豊太閤參拜の船中此島の名護屋の前面に横たはるを視て彼の姫島は

實に吾陣營の壁の如しと言はれしを名護屋呼子の里人等何時となく

加部島と號へ英雄一朝の偶言終に神代固有の名を歴し今日加部島と

命名するに至りしも猶官省の文書には姫島の名僅かに殘れり

古器物の現存する物は正安二年の銘ある白木の假面二個俗に火玉水玉
と稱するもの

と時代不詳なる石像二軀糟粕手鑑四冊あり寛文十二年正月大河内造酒之
允と云人の奉納せし所にし

織田豊臣二氏より徳川氏の始に至る諸大名高僧
知識其臣名家の書状花押等を集めしものなり

呼子名古屋加部の中央に盡せる位置にあつて天然の風光あり呼子浦
一帯を稱して盃の浦とも云ふ其形の似たるを以て名つけしか全様の
島二個竝列し何れも群松繁茂し干潮の際は内地より徒歩して渡るを
得春の汐干夏の海水浴等には格好の場所なり
加部島に十二景あり

神山朝霞 木の宮夜雨 立石眺望 井手川登 扇川清水

津井田野夕立 杉の濱の秋 長田落厂 領巾伏山晴嵐

平岳山暮雪 片島歸帆 龍雲寺曉鐘

片島

加部島の南方五十餘戸より成る小市街なり常に大小の商船輻輳し充
分風波を防く天然の良湊なり家は概ね船宿肥料商にして公娼藝妓等
あり呼子殿の浦と相待つて弦聲絶ゆる時なし

名古屋城址

名古屋城址は名古屋村大字名古屋の中央勝雄ヶ嶽一名垣添山にあり
天正年間豊臣秀吉征韓の擧あるや龍臣寺澤志摩守に命して城を此地
に築かしむ六十餘州侯伯の陣營其四邊に散布し準繩殆んど二里餘に
渉り一望實に其規模の宏大なるに驚かしむ戦已に終りを告げ全軍此
地を撤するや城郭を擧げ之れを寺澤廣高に與ふ廣高海路唐津に運致
し以て舞鶴の城を成す故を以て壯大東亞の山川を睥睨せし金城も空
敷一丘の荒墟となり今や僅かに其偉跡を存するに過ぎざるなり現今
郭内の大半は官有禁伐林として疎々老松の聳るのみ然れども葺し山
河の風色は依然として遠く慶長の面影を止むるものゝ如く彌客一度
杖を本丸に樹んか西北は漫々たる滄海を隔て、壹岐對馬遙かに朝鮮
と相對し壁島は名古屋呼子の灣口に横はりて能く玄海の波浪を碎き

餘音錦々として恰かも望夫の恨を訴るか如く東は唐津港を壓して浮岳の靈峰を望み南は天山遠く雲霞の間に聳へたり徐かに磁器を案すれは針は雞林の水雲を示し眺望雄偉氣宇殆んど坤軸を卷き壯觀筆の及ぶ處にあらず宜なる哉四時雅客の跡を空ふせさるや當時本城陣營の圖及陣處記等同地の舊家松尾家にあり今其一二を抜て左に録す

摘要

一秀吉我全國を平け終りて天正十四年使を韓國に遣し隣國の好を厚ふせんことを以てす彼れ海路容易からざるの故を以て辭す秀吉再ひ使せしむ彼れ辭するに堪へず使者三名を派して來朝せしむ秀吉返書して曰く『我日本の如き小國のみを治めて日を費さんは大丈夫の志にあらず依て大明國に入て皇帝たらんと欲す時に臨まば朝鮮を以て先鋒たらしめん云々』と三使拜して國に歸る於是秀吉關白職を秀次に譲り愈朝鮮征伐に決す

一開戰準備の爲め七ヶ年の星霜を経文錄元年名古屋の陣營成る
一文錄元年四月朔日渡海の軍勢十四万人名古屋を發し風波の爲め登洲勝本に泊する十日先鋒小西行長四月十二日釜山に着岸し直ちに其地の一城を抜く
一秋七月援軍として増田長盛石田三成外大將十二人雜兵七万人渡海す
一行長連戰皆健ち進んで平壤に明の大軍と戦ひ之れを抜く時に明朝沉維敬なるものあり策を獻して日本軍を僞る軍中石田三成私心あり行長を説て休戦せしむ
一此月太閤母君逝かる秀吉指揮を前田利家徳川家康に委ね上阪し同九月再度歸陣せらる
一行長等沈維敬か策に僞られ軍を息ひ居りしに圖らず明軍大學して平壤に迫る我軍大に敗れて京城に走る

一其後沈維敬か媾和の交渉に接し我國よりの提案左の如し

一両國の和親代々變る間敷事

二日本より攻め取りし地は永く領すべきこと

三朝鮮より日本へ貢を入るゝべきこと

四太閤をして大明王となすべきこと

外三ヶ條は國家の秘すべきことに付略すと

一然るに彼れの奉書中太閤秀吉を封して日本の國王とすと云詞あり

秀吉奮然怒て烈火の如く小西及使節を斬に所せんとす諸臣の請に

より之れを許し再度征韓のことに決し一同渡海再征す

一文錄三年八月十八日太閤病を以て薨す壽六十三

一太閤薨去のこと征韓諸軍に傳へたれば一同軍を引上げたり

一朝鮮俘虜は慶長十一年送り返す

一在留軍勢十万五百八十五人

一當時五宿老と稱せしは

家 康 輝 元 季 家 利 家 景 勝

三小宿老とは

生駒雅樂頭 中村式部輔少 梶尾帶刀

五奉行とは

淺野彈正少弼 德善院増田右衛門尉

長束大藏太輔 石田治部少輔 立以

準備諸般の事

一東は常陸より南海を経て四國九州に至り海に沿ひたる國々北は秋

田坂田より中國に至りて其國々の高十万石に付大船二艘宛用意可

有之事

一水主の事浦々家百軒に付十人宛出させ其手其手の大船に可用以若

し有餘の水主は大阪に相赴くべきこと

一 藏納は高十萬石に付大船三艘中船五艘宛造り可申事
 一 船の入用大形考合候て半分の通算用奉行方より請取可申候相殘分
 は船出來次第請取可申の事

一 船頭は見計次第給米等相定め可申候事

一 水主一人に扶持方二人此外妻子の扶持方遣し可申の事

一 陣中小者中間以下女扶持其者の宿々へ遣し可申候是は此度高麗名

古屋へ出立候者不殘如此可遣の事

右條々無相違令用意天正廿年春攝洲播州泉州の浦々へ令着岸一左右

可有之者也

天正十九年正月廿日

秀吉

軍役の定

一 四國九洲は高一萬石に付て六百人之事

一 中國紀洲邊は五百人

一 畿内は四百人

一 江尾濃勢の四ヶ國は三百五十人

一 遠參駿豆邊は三百人從是東は何れも二百人たるべし

一 若洲より能洲に至て其間三百人

一 趣後出羽邊二百人

右之外來年極月に至て大阪へ可被參着候出勢の日限重て可被仰出候
 間宿陣不指令様得其意可申者也

天正十九年三月十五日

秀吉

掟條々

一人數押出の事六里を一日の行程とす乍去在處の遠近六里の内外奉
 行計らひ次第たるべきなり即宿奉行定の條前後無爭論万順路に可
 有之事

一 旅宿家賃は出し申間敷候薪秣等の代は宿元と相對し出だし可申候

事

一 津々浦々番等に有之者屋賃の義出し可申候鉄砲の者等の義其主人より出し可申候事

一 泊々にて扶持方馬の飼料令下行之事

一 おしかひ狼籍追立夫其外萬非義有間敷事

一 泊々宿々に於て理不盡の義仕候者あらば當座に咎め懸り口論に及間敷候其主人の假名實名能々記置き其上を以て可相理之事

一 何方に於ても徒ら者一揆徒黨ケ間敷様子あらば密々可爲告知一廉御褒美可被行之事

一 一里々々に早道の者二人宛定置候て名古屋と大坂との所用早速相叶候様可有之事

右之條々堅く此旨可相守若違背の義有之者奉行人迄爲告知可申者也
文錄元壬辰年三月朔日より先陣小西攝津守加藤主計守是を先として

毎日怠ることなし相續其勢夥しき肝を消計也漸々先勢も皆ろう行ければ同十六日將軍都を立て打せ給ふ行列の法度正敷体古今有まじきことにし侍るとて見物の老若譽る聲巷に洋溢せり同廿七日より跡備の勢日々打續き卯月五日六日頃に行滿ぬ肥前國名古屋は其上松浦佐用姫が唐土船を慕ひし港なり此處を旅館と相定められ諸候の勢兵を以てこしらへ侍りぬ總軍勢に扶持方馬の飼料其外水主楯取に至る迄四十八万人の兵糧無懈怠下行の事寔に蕭河も及ぶましきにや思ひ知られたりと舊記に見ゆ

城郭結構

一本丸 東西五十六間南北六十一間

戌亥角天守臺 臺城高十五間

一二丸 東西四十五間南北五十九間

一三丸 東西三十四間南北六十二間

一山里丸 東西百八十間南北五十間

一遊撃曲輪 (韓國遊撃將軍を捕虜として召置し處)

一彈正曲輪 (淺野彈正屋敷)

一水の手曲輪

一腰曲輪

合せて拾四曲輪にして此面積拾餘町歩なり

一城の回り拾五町

一城より出口五ヶ所

以上

餘録

一廣澤寺に一株の蘇鉄あり加藤清正朝鮮より携へ歸り豊公に献したるに公自から栽られたりと今や軀幹蟠屈數十支に分かれ老姿赴ありて内國無比の蘇鉄なり之れ太閤の別殿にて愛妾廣澤の局の居間

跡なり主公已に逝て彼獨り存す蘇鉄若し靈あらは何の感かある猶此寺には加洲前田侯より贈與せられたる水鉢其他の古器物千の利休手植の竹今猶繁茂し茶家好事家に愛玩せられ利休竹の名最も高し

百年をいくつ重ねて若緑り

冬 外

(名古屋城諸將陣營并に蘇鐵の圖を雅客の需に應し分譲し居れり)

一喜田神社とて清正の家臣喜田孫兵衛 (又毛谷村六助とも云) 蔚山の役奮闘戦死せるを以て其首級を持歸り埋葬せし處なり里民祠を立て之れを祭り喜田神社と號す

一法光寺の假山は曾呂利の築く處園中櫻樹あり豊公の自栽なりと今や枝幹數十坪に涉り花時行人を止む

動しと共に櫻のにはひかな

冬 外

一龍泉寺は徳川氏の陣地にして竹の丸にあり結構の遺跡舊時を知る

に足る脇坂安治戰場に用ひたりと云ふ鏡一輛あり金色燦然たり
鎗跡のそらに寒し古鏡 冬 外

遙々と跡訪ひ來れば月のみそ其のかみしるやかかげあ
はれなる 子爵 源 長 生

兵の敵とも見ゆる穂麥かな 悠 々
ほりたして泪かふるや古瓦 魯 月

音高き名古屋大城の山風はからくにまでもふきなび
けつゝ 芝園 俊 雄

眼にしみて寒し松風浪の音 冬 外

唐津名所案内終

明治三十五年十月五日印刷
明治三十五年十月十日發行

正價 金參拾錢

編輯者兼

佐賀縣東松浦郡唐津町大字唐津
百五十八番地平民
牧 川 茂 太 郎

印刷者

矢 野 松 吉

發賣所

佐賀縣東松浦郡唐津大石町
大 和 屋 書 林

發賣所

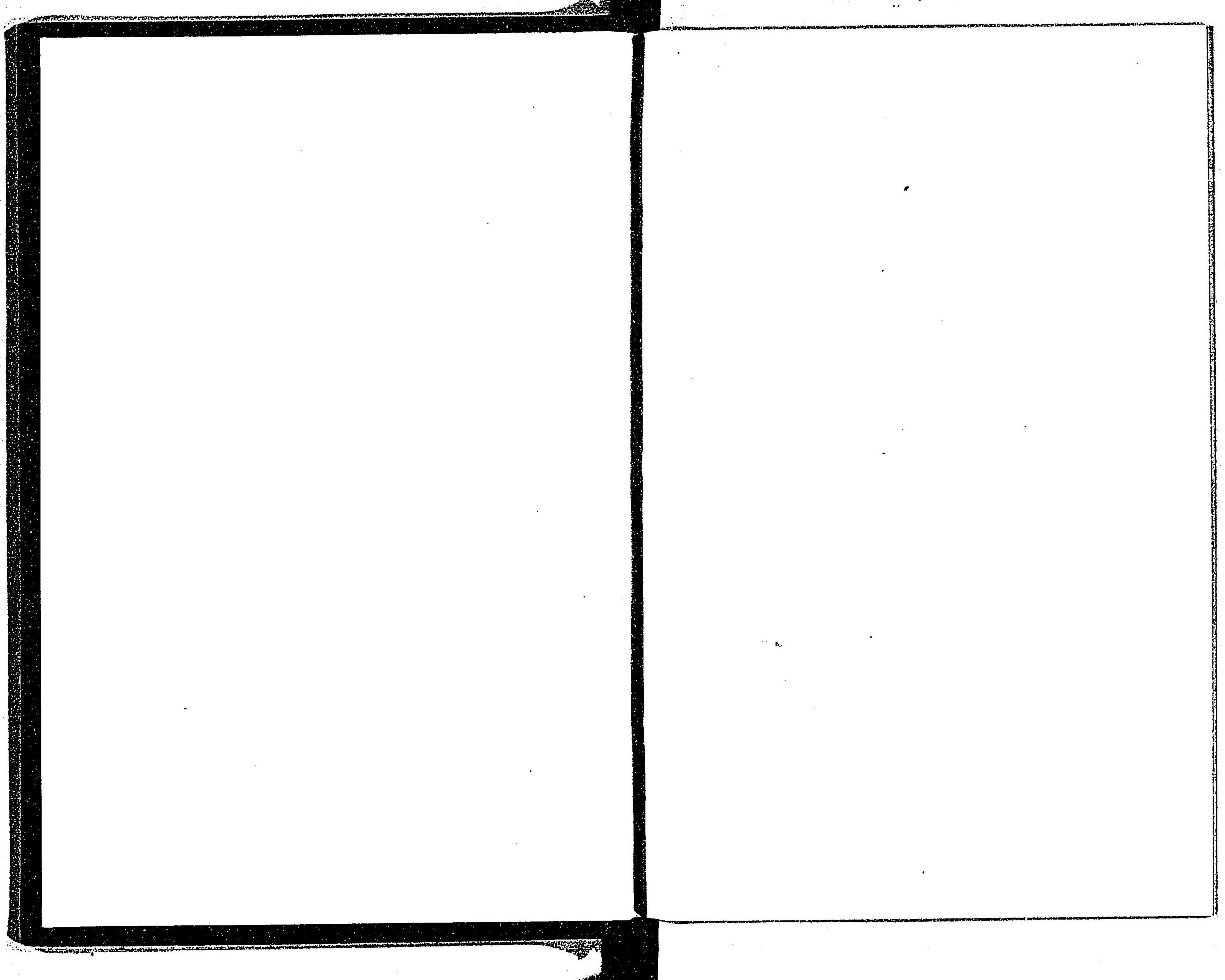
佐賀縣東松浦郡唐津京町
新 大 和 屋 書 店

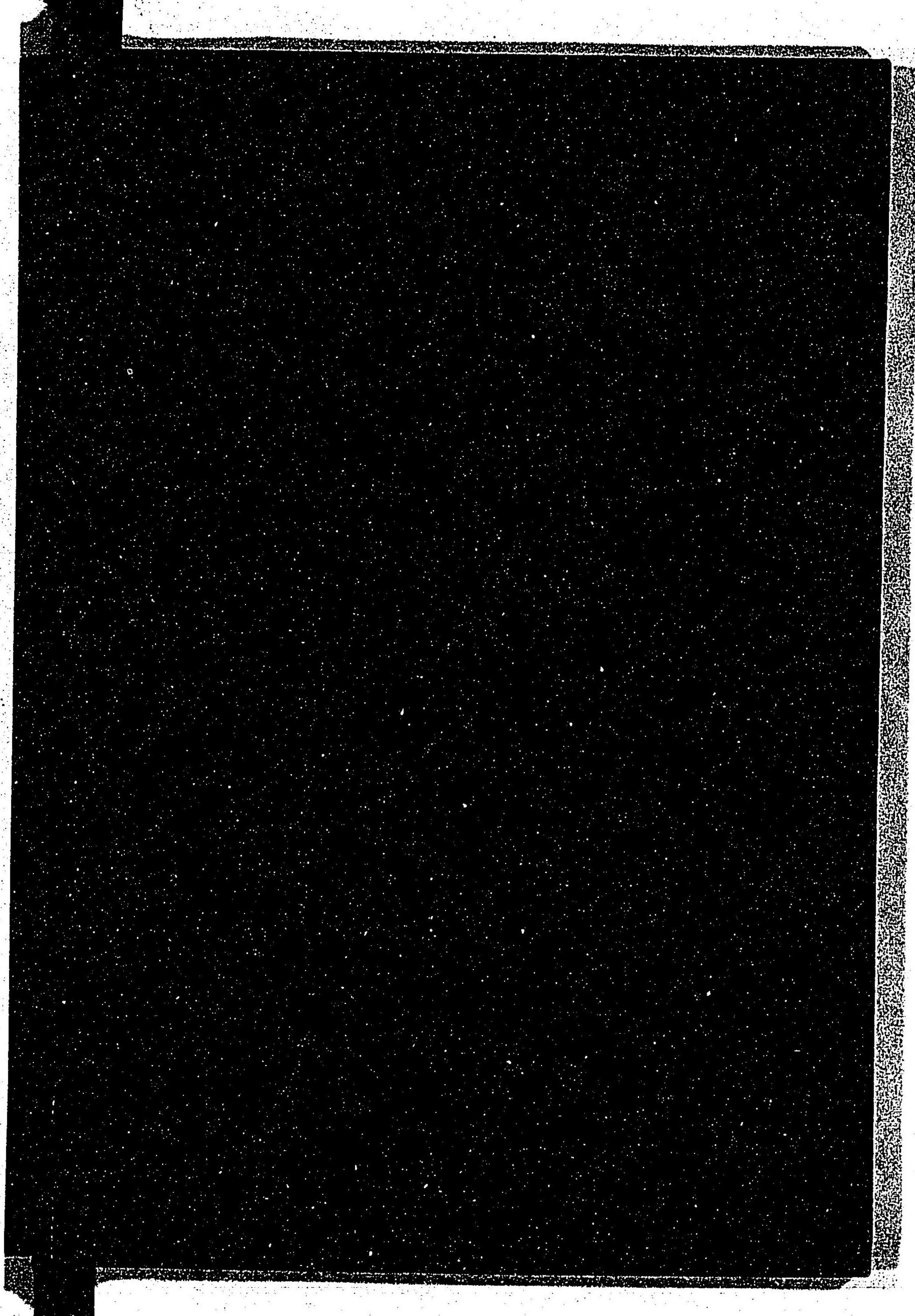
不許複製

發賣所

大阪府南區順慶町四丁目
此 村 書 店

2-140





96

70

026179-000-0

96-70

唐津名勝案内

牧川 茂太郎/編

M35

ADC-3864



